

硯 滴 考

[12]

令和四年六月吉日

公益財団法人

大平正芳記念財団



硯
滴
考

[12]

目次

はしがき	3
防衛問題の基本にあるもの	4
新しい自民党の創造	8
霜を踏んで堅氷至る	24
対談 調和の国日本に	29
形正しければ影曲がらず	47
国際政治家としての大平正芳 (前編)	68
渡邊 昭夫	68
あとがき	103

はしがき

この度『硯滴考』12号が上梓されましたので、お届けいたします。

世の中は混乱を極めておりますが、大平の書き残した言葉や文章をご参考にしていただければ幸いに思っております。

尚、この度は岸田文夫総理大臣が米国をはじめ西側諸国を結束され大役を果たされました。今後のますますのご尽力を心よりご期待申しあげます。

令和四年六月吉日

公益財団法人大平正芳記念財団

理事長 大平 知範

防衛問題の基本にあるもの

『現代防衛論集』（防衛研究社、1965年）に「防衛意識の昂揚」と題して掲載。『春風秋雨』、『全著作集』2巻（講談社）に収録。防衛問題の基本は、国民の防衛意識の高揚と、それを培う政府の確たる意識と責任だと論じている。この教えが現下のウクライナの大統領と国民の間の強い絆の「基本にある」こと、だからこそ世界中の共感と支援の広がりを得ている。60年前の教えを国も国民もあらためて再考の要ありと痛感。

一国の防衛の基本は、何といつても、国民の防衛意識の昂揚充実にある。防衛力の具体化された装備やそれを組織管理する機構は、いうまでもなく大切であり、友邦との間に結ばれた防衛に関する条約ないし協定も、もとより重要である。しかし、それらを支え、その機能を十全に発揮し、防衛力全体に生氣を吹き込むものは、申すまでもなく国民の防衛意識である。

しかしながら、防衛意識が大切であるといつても、それ自体当然のことであり、そのこと

を鼓吹するだけでは意味がない。国民の防衛意識の昂揚は、坐して得られる贈物ではない。まず第一に、国民に対する政治責任に忠実であらねばならない政府自体が、防衛の本義とこれに対する責任にみずから徹することである。もともと政治主体の在り方が政治の基本であるからである。政策が実効を収め得るか不毛に終るかは、政策技術の巧拙によるよりも、政策主体の主体的真実性にかかるところがより大きいからである。政府がしっかりと意識と責任に徹するところから、国民の防衛意識は培われるのである。

友邦との防衛に関する条約、協定についても同様なことがいえる。条約といい協定といい、いずれもこれは紙に書いた約束である。その文言もおろそかにはできないが、その約束を支える精神と、その約束を守る精神がより大切である。したがって政治の主体たる政府が、まずこの精神に忠実でなければならぬ。世上、往々にして条約や協定における文言の改廃が熱い論議の対象になるが、本当のところ文言の改廃自体よりも、その約束を守る精神の方が一層重要である。

このような考え方に立脚して、今日の防衛体制の問題を考えると、われわれが真剣に取組むべき問題は、実は壮大な防衛構想といわんよりも、足下の現実によくの問題があることに気がつくのである。政府と防衛庁が、しっかりと防衛に関する責任と自負をもつてこ

とに当ることが何よりも重要である。自衛隊の要員に対しては、深い愛情と尊敬の念を以て処遇したければならない。与えられた装備と費用については、厘毫も無駄のないように生かして使わなければならぬ。友邦との盟約の実行には、神経質なまでに周到であらねばならない。こういう卑近なことに欠けるところがあるのに、壮大な防衛論議を展開しても、それは自他に訴える真の説得力に乏しく、その実りを收穫することも覚束ないのではなからうか。まず、足下を凝視せよと私は主張したい。

一つの問題を巡る客観的条件を分析吟味して、そこからわれわれの施策を練り直そうとする発想は、どちらかといえば西洋的な思考型である。それ自体尊いことであり、それを懈怠してよいとは思わない。しかし、わが国の今日的課題としてより重要なことは、足下を固めることではない。

中共の核実験が緒についたことは、われわれの深甚な考慮を促す重大な与件である。この与件の発生に触発されて、わが国の防衛論議が活発になってきておることも事実であり、それ自体、歓迎すべきことである。ただ、私がいいたいのは、今日あるがままの既存の防衛体制の充実に、われわれが熱心であり、忠実であるかどうかの反省が、すべての論議献策の出発点でなければならないということである。

現行の日米安保条約を軸とする日本の防衛体制の充実に、真剣な努力を重ねることこそ当面の急務であり、その努力の限界に立ちいたって始めて、われわれは次の課題に有効に立ち向う資格が得られるのである。政府の対内、対外にわたる信用と權威は、実はこういう地味な努力に依存するものであり、内政の推進も外交の展開も、こういう努力を抜きにしては空念仏に終るといえる。青い鳥は深山幽谷に住んでおるのではなく、自家の軒先に巢をもっておるのである。

新しい自民党の創造

『月刊自由民主』262号（77年11月）に掲載。『全著作集』5巻（講談社）に初出収録。前11号の無党派層問題（自民党・野党・国民自身の問題）を詳論。前号の論（自民党以外に日本の帽子を被った政党が必要で、それによる二大政党を望む無党派層論）に応える野党が必要。それでも負けない自民党改革を常に図ること！との全国若手党員への激励の講演。

“勝者なき選挙”の意味を問う

「若くして学べば壮にして成すところあり。壮にして学べば老いて衰えず。老いて学べば死して朽ちず」という論語の言葉がある。

私は党本部主催の研修会に諸君が揮つて参加して頂いたことに感謝するとともに、この機会に、諸君が多くのことを学びとつて頂くことを希望する。

さて、七月の第十一回参議院選挙は、われわれに多くの示唆を与えた。この選挙において

わが党は六十六人の当選を果たし、過半数を確保し、党のいわゆる長期後退傾向にようやく歯止めをかけることができた。が、このことは、自民党の勝利を誇示できるほどでもなかったと私は思う。それでは他の政党はどうであったかという点、他の政党もわが党と同様、確信をもって勝利を宣言できる政党はないように思う。

自民党は、地方区で若干得票率を伸ばすことができたが、全国区では五百万程度の票を失った。これは前回より公認候補を十三名減員したという戦術上の影響であったとしても、結果としては、堂々と議席とともに総得票を伸ばしたとはいえないのである。

社会党は全国区で二・二パーセントの票を伸ばし、地方区で〇・一パーセント失ったが、議席では前回より一名減で、それほど大敗とはいえない。しかし全国区当選の十名を見ると、最下位の五十位に近いところに、これまで社会党を支えてきた自治労、国労、日教組の候補が並んでおり、一人おいて五十二、三、四位に共産党候補がくつわを並べて惜敗している。もし共産党がその公認候補を一人減らして六人に絞っておれば全員当選したであろうから、社会党は共産党の戦術上の失敗に救われたといえないことはない。

公明党は全国区九名、地方区五名で前回どおり。全国区の得票を二・一パーセント伸ばしたが、地方区は二百五十万票を失っている。これは自民党の全国区と同様、戦術上候補者を

極端に絞った結果であると思う。民社党も全国区では得票を一・二パーセント伸ばし議席を一名ふやしている。このようにみてみると公民両党はまず現状を維持したということがいえる。共産党は全国区、地方区とも大敗であった。

勝利した政党がなかったこの選挙は、何をわれわれに教えているのか。一言に言うなら、それは無党派層というか、政党を支持しない勢力がジリジリ肥大化していることを物語っているように思う。

それはまず選挙前の世論調査で明らかであるが、最近の選挙の投票率にも表われている。今回は全国区、地方区とも六八パーセントの投票率で、三年前の七三パーセント、昨年暮れの総選挙の七三・四五パーセントに比べ五パーセント近く低くなっている。これは魅力ある政党を発見しかねている層が五パーセントふえたことであり、いわゆる無党派層の肥大化という傾向を示しているといえよう。

無党派層とは、政治学者の分析によると、一つは主婦層、第二は退職者層、第三は二十代の青年男女だといわれる。

平衡感覚鋭い無党派層

主婦は今まで、家事、育児に追われ、ほとんど働きづめで、自ら情報を摂取し、消化し、整理して判断する余裕を持たなかった。それが最近では家庭の電化、機械化によってこれらの労働から解放され、情報化時代に適応する能力と余裕を持つようになり、このごろは主体的な意見を持った政治勢力として急速に成長してきた。

退職者層であるが、かつて「人生五十年」といわれたのが、今は平均寿命が七十数歳に延びてきた時代である。その原因として医療の技術や設備が進歩し、医療の機会が十分与えられ、優れた薬品の開発があり、何よりもわれわれが摂取する栄養が非常に多くなったことがあげられよう。長生きをするようになって必然的に生まれてくるのが「第二の人生をいかに生きるか」ということである。そこにどういふ憂いがあり、願いがあり、望みがあり、どのような生きがいが開発されるべきかということが退職者の期待だと思うが、それに十分応えている政党が現状では見当たらないということだと思う。わが国が欧米型の高齢社会になるのは二十ないし二十五年ぐらい後といわれているが、その層の肥大化は目下加速度的に進むつつある。

第三は青年層。おしなべて日本の二十代は非常に体力にも優れ、メンタリテイも決して不健全ではないといわれている。NHKの昭和四十七年と五十一年を比較した青年の意識調査によると、たとえば「望ましい政権」について四十七年は「保守政権を望む」というのが三八パーセントで「革新政権を望む」と答えたのが四七パーセントだったのが、五十一年には「保守」が四八パーセント、「革新」が三八パーセントと大きく逆転している。四年間で二十代の若者たちが保守的傾向を強く示してきたことが歴然と出てきたのである。

「友だちを大切にする」「命を大切にする」「自由を大切にする」という三つの大切に
する対象については、四十七年は「友だちを大切にする」が五九パーセントだったのが、
五十一年には八一パーセントに飛躍。「命を大切にする」は五二パーセントから七〇パーセ
ントに、「自由を大切にする」は五七パーセントから七八パーセントにと、非常に健全な方
向を示してきている。ところがこのような方向をとっている若者の希望や願いに十分応える
だけの政党がまだないわけである。

一時期、共産党がこの層の一角に食い込み、各大学の学生運動の主導権をとったことも
あったが、今では「共産主義や社会主義はもう古い」ということで、社会主義や共産主義は
若者たちには必ずしも魅力のあるテーマではないようである。この層をどうつかむかが、こ

れからの課題であるといえよう。

このように無党派層は、漸次肥大化して、ある時には自民党に投票するが、ある時にはその同じ人が共産党に投票するというように鋭い平衡感覚を持った動きをする。そしてこの勢力の動向が、政治のあり方に大きな影響力を持ってきたように思われるのである。

自民党への評価、謙虚に受けよ

参院選前に行われたマスコミの世論調査を精細に見ると、「どういふ形の政権を望むか」という場合に「自民党の単独政権」というのは比較的少なく、「自民党と他の党の組み合わせによる安定政権」という願望が強く、非常に現実的になってきている。そして野党連合政権というようなものは本気で相手にしていないことが明確に示されている。

野党連合というのは、社公民、社共、全野党、何れを軸とするかについての方法論さえ確立していないのが現状であるが、選挙前になると各野党とも、自分に都合のいい形の連合政権構想を発表する。しかし、国民の意思は決してこのような実現性のない観念論には耳を傾けていないことを、今度の参院選は示したように思われる。

もう一つこの参議院選挙が示した特徴は、いろんな政治勢力が登場してきたことである。社会市民連合、革新自由連合、そして新自由クラブも初めて参加したし、女性党というものも出て、カラフルな選挙になったが、国民はこれに対しても冷静な対応を示したように思う。すなわち、アマチュアリズムの政治論を弄ぶ勢力に政治を任せるほど現状は甘くないという認識をもって、現実的な審判を下したのである。

では、自民党に対して国民はどのような評価をしたか。結果からいうと過半数の議席だけは与えてくれた。これは自民政権によって政局の安定を望むしか道がないという考え方もあって、自民党が立派だから、あるいは魅力があるからだということではない。われわれはこれをそういうものとして謙虚に受け止めなければならぬと思う。

また、国会運営その他においても、自民党だけの力で政局を運営できるだけの安定過半数の議席を与えられているかという点、そうではない。どうしてもわれわれは謙虚な姿勢で、各野党の協力も求めながら、用心深く、真剣に政局の運営をしなければ乗り切れない。

一方において「しっかりせよ」というお灸をすえながら「しかし自民党に過半数の議席を与えておかないと日本の内政、外交が心配だからこうするのだ」といわぬばかりの結果を国民は示したのだと思う。

今の自民党に対する評価と期待がそういうものであるとすると、自民党とは一体どういう政党なのか、この際いっぺん裸にして検討し直し、いいところを伸ばし、悪いところを改めていくことが次の課題になってくる。

特定階層に掣肘受けぬ自民党の特長

現代は政党政治の時代である。現在のように世論が多種多様に存在する時代は、どうしても政党が介入して、極端に細分化された世論を、いくつかのグループにとりまとめる。かくして整理されたものを政党の政策として優劣を競い、その中で多数を占めた党が政権を担当するというのが議会制民主政治である。いわば、政党が多様な世論を集約するという役割を果す。

その集約の方法は各政党によって大きな違いがある。党によってはその党規や組織が確立し、それが大きい権威をもっているものがある。そして党が前衛となって社会を変革させようという野心的なねらいを持った政党でもある。そうした党の党員はそれだけ厳しい規律の下で、党に対する忠誠を第一に置いている。その面からだけいうとそういう政党は立派な近

代政党だと思う。

しかし、自民党はそういう野心的な政党ではない。またそういう嫉妬深い、排他的な、独善的な政党でもない。世の中を根底から変革してやろうというような、神を恐れぬようなことは自民党は考えてもいない。

われわれの党は「自由に商売し、のびのびと働き、家庭や友人を大事にし、余暇を楽しみ……何もかも、今皆さんがやっていることを尊重する。しかし、地方、中央の政治にかかわることがあれば自民党と相談して下さい。皆様と一緒に改善するよう努力しましょう」というようなごく控えめな政党なのである。

庭園にたとえていうと、同じ木ばかりを植えた単調な庭ではなく、わが党はいろんな種類の、高い木や、低い木がたくさん雑然としている、しかし全体としてはまとまりのある庭園のような政党だと思う。

音楽でいうと、一つの楽器だけを奏でて、聴衆が聴こうが聴くまいが「これが正しい音楽だ」というのではなく、わが党はいろんな楽器を同時に演奏するオーケストラのような、雑然としているが重量感のある、しかもちゃんとしたリズムを持っている、そういう政党であるように思う。

単一な専門店に対して、百貨店のような存在が自民党だと思ふ。

国民はこれまで自由な選択の中から、長い間、そういう自民党を選んでくれた。一方、今日までの自民党の行き方は、多くの国民の支持を得ることができ、大筋において間違っていないかと思う。

しかし、組織は常に改革をしなければその生命力を維持することができない。自民党も古い体質から脱皮して、党の改革をしなければならぬというので、これまでもいろんな試みがなされた。しかし、われわれの党は、非常に幅広く、つかみどころがないような政党に見えるからこそ、多くの支持者を集めることができ、長期にわたって政権を担当できたと考えるのである。

いかに党規や組織が確立していても、支持者が五パーセントにも及ばず、政権にははるかに遠いというような道は、われわれは賢明にも歩まなかった。その意味で今日までの私どもの進んだ道は正しかった。したがって今後も大筋においては同じ行き方で、またこのような体制でないと、今の複雑な時代に対処することはできないように思われる。

わが党は多くの人材が全国から参集し、長く政権を担当する間に、内政、外交において貴重な見識と、経験を積むことができた。それ故にこそ柔軟な政策と、適切な対応力をこれま

で發揮できたのである。

例えば外交においては、われわれは親米政策を基調にしたが、ソ連や中国とも国交を正常化し、グローバリーに平和外交を展開する構えをつくり上げてきた。内政面においては経済をたくましく成長させながら、教育政策、福祉政策、防衛政策とも適正なバランスをとってきた。「自民党に任せておけば大きな心配はない」という信頼感が国民意識の根底にあつたからこそ、今日まで政権を担わせてもらったのだと思うのである。

そして、自民党はこれまではそのようにして何かと政権政党としての責任を果たすことができたが、これからはどのような問題と取り組まねばならないか、それにいかに対応していくべきか、これがわれわれの課題になつてきた。

“重い責任、弱い支配力”は自由世界の趨勢

われわれが政権を担当しているこの三十年の間に、世の中は大きな変貌を遂げた。戦後の世界を支配し、リードしてきたアメリカの経済力と軍事力に限界が見えはじめ、通貨の不安定や、石油を初めとする資源ナシヨナリズムの風潮が現われ、四年前には石油が一挙に四倍

にもなるという空前のできごとが起こった。

世界の平和維持機構である国連も、いまやアメリカに次第に背を向けるようになり、国連の支配権は、むしろ多くの非同盟諸国とか開発途上国に移ってきた。そして資源保有国にはドルが蓄積され、非資源国には逆に赤字が累積しているということが今、急速に進行しつつある。また、今までコンピュータその他の大型技術が争って開発されてきたのが、最近では世界の技術開発が停滞状況にある。

長い間続けてきた高度成長が生み落とした問題、すなわち公害問題、都市問題、人間関係の断絶など、様々な問題がふき出してきた。数年前までは大丈夫だと信じていたわれわれの立つ地盤が、急速に崩壊を始めたように感ずるわけで、現代は非常に困難な状態の中に世界全体がおかれている情勢である。

成長と繁栄の時代が終わり、いわば停滞と不安定な時代が始まったのである。これを反映して、政界も多党化し、一党が圧倒的な支配力を発揮することが不可能となった。その上に立つ政府というのは、責任は重いが、力は弱くなってきた。自由陣営のどの国を見ても、与野党が伯仲化し、政権が弱体化するという、従来とは勝手の違った難局に直面しているのである。

こういう時代に対処して、われわれは「何をなすべきか」「何をなすべきでないか」ということを、政治においても、外交、防衛、教育においても、経済、福祉、社会においても、あらゆる領域にわたって、ここでいっぺん前提を抜きにして考えてみなければならぬ。われわれが直面している問題の、幅と深さを十分に測定してかからなければならぬ時代がきた。新しい手法を開発しなければ解決できなくなつた問題がいたるところに浮かび上がった。まさに容易ならざる時代だといわなければならない。

古くて常に新しい課題「党改革」

しかし私は、問題が多いということは、ある意味において幸せだと思う。あまり問題がなければ、人間の能力は次第に退化し、人間は、怠惰になり「小人閑居して不善をなす」ということになりかねない。やはり常に難しい問題の挑戦を受け、それに対応していくという忙しい毎日の中に、真の生きがいと、自己を研鑽する機会がある。われわれは前述のような困難な事態だからといって、少しも滅入る必要はない。

ただ、大きな方向として考えられることは、やはりこれからも、政治においては複数政党

が切磋琢磨する議会制民主主義を、経済においては自由な市場経済を通ずる経済の管理、そして外交・防衛においては、平和外交と控え目な防衛力による安全の維持というようなものを、大きな筋としてははずさずに推進していきたいと思うのである。

このことは、幸いにわが党ばかりでなく、共産党をも含めて、今や各政党の共通のコンセンサスになってきている。これはまた日本の民主政治が、かなり成熟してきたものとして十分に誇り得る成果でもある。したがって、内外の情勢がいかに厳しく、かつ困難ではあっても、まずこの基盤、この三原則を狂わせないように、確実に堅持していく必要があると思う。

そのフレームの中で、われわれがまず考えなければならないことと、考えてはいけなことを賢明に選択していくことがこれからの仕事である。それを究明して、われわれの未来を築いていくだけの高い思想を学びとらなければならない。

第二は、われわれの生活に対する考え方である。むかし「思想は高く、生活は低く」といわれた。低い生活を探求する必要はないが、質実な生活態度を心がける時代がきたように思う。ここでいう質実な生活とは、物も、金も、時間も、友だちも、それぞれを大切にすることである。高い水準の生活、広い行動半径を無限に追求し、天まで届くバベルの

塔を建てるのがわれわれの生活の目標ではなくて、われわれの目標は、質実で充実した、生きがいのある気品のある生活を築きあげていくことである。

そして、自分自身のためばかりでなく、他のすべての人のために、地域のために、職場のために、そして国のために、大きくは世界の人類のために、われわれの行動を強めていくことが大切である。

そういう社会をつくるために、わが自民党は責任ある政党として、国民各位の理解と信頼を深めることが何よりも先決である。われわれが進み、歩んできた大道に誤りがなくとも、われわれの党の体質や、党の内容に対する批判は謙虚に受け止め、開かれた、愛される党への脱皮は、われわれがその責任において、国民の協力をとりつけながら成し遂げなければならない。

われわれは、一月の党大会において、党改革の方向を打ち出し、四月の臨時党大会で、改革案が提案され、承認された。そして現在、新しい組織づくりや、改革が精力的に実行されつつあることは、これまでの本誌「党改革シリーズ」でも明らかにされてきたとおりである。

わが党はこの十一月十五日で結党二十二周年を迎えるが、党改革は二十二年前の結党以来

の、古くて常に新しい課題であった。その困難な問題が今度こそ確実に実現されなければならぬ、今後は党のおかれた背景、全党員および支持者の熱烈な支援という、またとない条件に恵まれている。われわれは現時点において、それが九割方実現される緒をつかみ得たと思っている。しかし、われわれは「九十九里をもつて半ばとする」という気持ちを持って、最後まで努力を重ねてまいらなければならない。そういう実践の中から、わが党と日本の未来が開けていくと確信している。

霜を踏んで堅氷至る

『月刊自由民主』（78年新年号）の巻頭言。『全著作集』5巻（講談社）に
初出収録。初出時と比べて読む臨場感の違いは、他人事でないウクライ
ナ侵攻の深刻さへの危機感の然らしむところ。そのために書かれたかの
ようで、まさに今、日本の在り方を考えさせられる論といえる。

す。一九七八年の新春を迎えるに当たり、国民の皆さんに心から新年のお慶びを申し上げま

新しい年を迎えて、あらためて思うことは、われわれの日本を取り巻く環境が、内外とも
に依然として不安定かつ流動的であることである。そしてそれに対処して模範的解答を書く
ことがどう考えてみてもむずかしいという点においては、昨年と変わらないということであ
る。しかし、こういう不透明な時代であるからこそ一步一步、可能性の限界に挑戦していく
強靱な精神力と不退転の勇氣、さらにはものごとくに動じない理性と転換期にふさわしい創造
力がいよいよ要求されるし、緊張した生きがいを感じる時代であるといえよう。

この一年を振り返って見るとき、国民の生活態度、考え方、経済の動き、あるいは政治の運営などにおいて、一兩年前に比べて随所に大きな変革の跡が見られる。転換期がまさに目に見える速さで進行している感じがする。

福田政権が誕生して満一年、われわれが第一に心がけてきたことは、政治の安定を基礎として、国民生活を守ることであった。常にその時に処し、問題の本質を真摯にとらえ、誠実に対応してきた。高い点数は与えてもらえないかもしれないが、精一杯やった積りである。

昨年の年明けと同時に二百カイリ問題、不況対策、円対策、貿易をめぐる国際間のトラブル、日中、日ソ問題、そしてハイジャック事件などに見舞われ、今年に持ち越された課題も少なくない。

この新旧の試練を克服していくためには、大きな流れの基本を見失わないことである。変幻自在のこの流れに逆らわず、暗礁をよけ、岩に激突しないように心掛け、また目標を見失って支流に迷い込まないよう、家計であろうが経済であろうが、あるいは政治、社会全般にわたって、誤った舵取りをしないよう心がけなければならない。

今日の情勢は、内外ともに複雑多岐にわたり、われわれの前途に立ちはだかる障害や、迷路はきわめて多い。今はそれに対する適当な道標みちしるべのない時代である。昔から、道に迷ったら

まず現在の位置を確認することが鉄則である。不透明の時代に立つわれわれとして、まず必要なことは、今、日本が置かれている位置を正確に知ることである。

日本人は、戦後政治の中で「西欧先進国に追いつき追い越せ」を目標に、わき目もふらず努力し、今この目標は曲りなりにも達成された。なおいろいろの問題はあるが、所得水準は先進国並みとなり、教育、技術、文化の面では先進国の水準を上回るものも出てきた。もはや追いつき追い越すべき目標はなくなった。むしろ、われわれがモデルとしてきた先進諸国自体が、それぞれに難問をかかえて苦悩しているのが現状である。

今、日本に必要なことは、国情に合った独自の発展計画を設計することである。その場合、資源、食糧の多くを海外に依存する日本は、国際環境の流れに柔軟に対処できる“耐震構造”の設計図を書くことが要諦である。日本だけに都合のよい青写真をつくるわけにはいかない。今、与えられた課題の多くがそれであり、そこにまた、われわれの苦悩が存するともいえるのである。

このような時代に切望されることは、リーダーシップをとるべき政治が、いかに国際社会の一員として、あるいは国民の多様な要望に、迅速果敢に対応し、必要な政策を早急に行うにいくかということである。国会が伯仲時代を迎えた今日、われわれは政権を担当するも

のとして、異つた意見や相反する要求をいかにうまく調整していくかに、最大の責任を負っている。同時に伯仲時代は野党にも責任の一部を分担することを求めている。そして各自が共通の土俵で、融和と協調の精神を発揮していくならば、国民の政治不信は大きく解消されるであらう。

国民の信頼のないところに政治はない。その信頼を確保するために、われわれは政治と、政党の改革にこの一年、全力を傾注した。その作業は緒についた。今後は、確実に一つひとつ、これを成し遂げていくことによつて、国民の期待と信頼に応えていけると信じている。そして、出来ることと、出来ないことを明確にし、約束したことはどんなに苦しくても、必ず為し遂げる。この積み重ねがある限り、われわれは国民の信頼を失うことはない。

すでに、一時期ハシカのように流行した革新志向は、今再び自由主義に回復してきている。われわれは、大きく流れを変え初めたこのコンセンサスを、われわれの不注意によつて壊してはならないのである。

転換期を乗り切るもう一つ重要なことは、単に政治や行政に過剰な期待を寄せるだけでなく、国民一人ひとりが、それぞれに自覚を強め、自発的な努力によつて、現状を改善していくことである。変革期にあつては、華々しい勤きはなくても、一つひとつ、どんな問題にも

注意深く、努力を積み重ねることによって破局を回避する英知が必要である。

「霜を踏んで堅氷至る」という易経の言葉がある。物事は一挙には成就し難い。霜のよう
にすぐ溶ける結晶でも、それを踏み固めていくことによって、堅い氷ができるということだ
ある。

今、われわれの足元には堅氷はない。まさに不安定な霜を踏んでいる状態である。不純な
ものがあれば一つひとつ除去し、良い面を根気よく拾い出し、積み重ねて、よりよき対応と
信頼の上に立って、この新しい年を、希望に満ちた明るい年にしようではないか。

なお『月刊・自由民主』はこの新年号から書店販売されることとなった。本誌が全国津々
浦々にゆきわたることによって党広報活動がさらに盛り上り、党勢拡大の推進力となること
を期待している。どうか店頭購読に絶大なご協力を賜るよう切望する次第であります。

対談 調和の国日本に

内閣総理大臣 大平 正 芳
上智大学学長 ヨゼフ・ピタウ

『自由国民会議会報』(第7号、80年5月25日)に掲載。『永遠の今』(大平財団・昭和53年)、『全著作集』5巻(講談社)に収録。ヨゼフ・ピタウ(1928～2014)は、上智大学理事長、学長として上智大学発展の基礎を築いた。後にローマに戻りバチカン教育省局長、大司教となる。75歳でバチカンを辞し再来日され天寿を全う。それほど日本を知り尽くした西洋の知の巨人との日本論、日本人論の対談。むしろ現下の危機の時代においてこそ傾聴しておきたい示唆に富んでいる。

自由で秩序のある国日本

ピタウ 外国で、日本について、講演とか、あるいは記事を頼まれる時に、経済発展とか経

済成長について、私は、あまり話さないのです。なぜかという、全世界で日本の経済的な成長のことはみんな知っているんですが、しかし、私は、経済成長よりもっと大きな奇跡が行われたと思うからです。

十八世紀のイギリスの国会議員で、また政治思想家でもあつたエドモンド・バーク氏は、次のような言葉を言つたんです。政府をつくるのには、これという慎重な思慮深さは必要としない。なぜかという、権力の座を確立すれば、また服従を教え込めば、それで行政的なことは十分だ。また、自由だけでも確立しようと思つなければなおさら簡単だ。勝手気ままにさせておけばそれでいい。しかし、自由と政府をともに確立するのは、この世でいちばん難しいことだ。制約と自由、行政と自由、相対立するこの二つの要素を調和的に一貫した制度に合わせるのとはなかなか難しい——と。

そこで、私にいわせれば、日本は、ほんとうに成功しました。

大平 二つを調和させるといふ意味ですね。

ピタウ ええ、日本は、この自由と秩序を一緒に合わせた国です。全世界を見回しても、おそらく、この二つのことを、こんなに調和的に合わせた国はたぶんないかもしれません。ただ、自由の要素だけを取るならば、たぶん、アメリカは日本よりも自由であるかもしれな

い。しかし、秩序はそれほどでもない。秩序だけを取るならば、ソ連とか共産圏、あるいは独裁的な国家では、たぶん日本よりもまとまっているかもしれない。しかし、この二つを調和的にきれいに合わせた国は日本だけだろうと。

その意味で、私は、外国に日本を紹介する時に、いつもこの奇跡から始めるわけです。

大平 なるほど。

ピタウ 私も、外国人で二十八年間、日本にいて、一回も不愉快な体験をしたことはありません。夜でも昼でも歩いて、まあ危険はございません。また、全国を何十回も回ったんですが、一人でも、あるいは他の人と一緒に、たとえば身分証明書を出さなければならぬこととは一回もございませんでした。

外国へいったら、国内便に乗るためにも、いつも身分証明書を出したり、あるいはパスポートを出させたりしますが、ここはそんなことはありません。その意味で、政治社会としても、日本は、ほんとうにすばらしい発展成長したんじゃないかと私は思っています。

大平 うん、うん。

ピタウ もう一つ、言うなれば難しい点は、自由と平等で、自由を強調するところで平等は弱くなる。平等だけを強調するところでは自由は弱くなる。しかし、日本はちようどうまい

ぐあいに自由を守りながら、社会福祉的な平等も図ってきた。

二年前のことでございますが、私の母校であるハーバード大学の学長がきて、「日本はふしぎな国ですね」とおっしゃるんです。みんな、日本は社会福祉は遅れているといっているのに、「平均寿命はもう世界一ぐらいですね。幼児死亡率も最低、また犯罪の面でもいちばん少ない」と。

総理は、長い間、日本の国の運営にご参加なさって、大きな貢献をなさったんですが、この「自由と秩序」で、ご意見をお聞きしたいんです。

伝統と変化を同時進行させる民族

大平 日本人の政治的な能力というか、調和を保つ能力に高い評価をしていただいて、たいへんにうれしいやら、当惑するやらでございます。仰せのことは、確かに一面でそのとおりだと思います。日本は、秩序と自由というものがほどよく同居して、あまり摩擦を起こさないでやってきている国じゃないかと思えます。

しかし、先生がいまご指摘になったように、自由の点からいうと日本より優れた国もある

と。また秩序の点から見ると、日本より優れた国もあるけれども、両方をうまく調和をとっている国は少ない——ということですが、われわれが師と仰いでおるヨーロッパの国々は、生い立ちからいって、環境からいって、協力というよりは激しい対立のなかで、調和というよりは闘争的な状態のなかで生き抜いてきた歴史ですね。

日本の場合、そういうことがなく、海を隔てて大陸から離れた単一の民族が、単一の言語を持って、外からの刺激といえは、仏教でございませうとか、儒教でございませうとか、明治時代にいろいろ西洋の思想も入ってきましたけれども、日本を土台からやり直すほどの力にならないで、長い間われわれの伝承がどうか保たれてきたからではないか。つまり歴史の経過がそうさせたのであって、日本人がア・プリオリに、政治的に優れておるといえるのかどうか、私は若干疑問を持ちます。

しかし、人によつては、たとえばオーン・ダモク「恩田奎の誤記か。『日本人とユダヤ人』第五章参照」というような人は、「政治的天才ではないか」というような評価をしてくれる西洋の方もおりますね。確かに、われわれが自覚しないでおるけれども、日本の文化の中には、そうとうすばらしい宝が本来あったのかもしれないなあ、という感じがしないわけではございませんけども。

ピタウ 私も感じているのですが、ヨーロッパは、ある意味において革命によって進歩する。そして断絶があるわけです。日本の場合には、伝統を守りながら改革を行う。あるいは他の言葉でいうならば、保守主義と革命主義を一緒にしたというひとつの伝統があるということですね。その意味でも、**主義**にとらわれないで、国のために必要なものをどんどん受け入れると。

しかも、共同体は生きたものであると考えるから、今断絶して、今までのことを全部捨てるということではなくて、それを活かしながら発展させる。ほんとにすばらしい特徴ですね。伝統と変化を一緒にする。たとえば、明治四年でしたか、官庁で靴をはいて、そして机になった時に、それによって西洋服になったんだから和服は全部捨てたということではないんです。うまく両立して、まあうちに帰ったらちゃんと和服をきて……（笑）、その調和ですね。

大平 そうですね。

ピタウ あるいはパーティーに出ると、きれいな着物をきているお嬢さんと、またイブニング・ドレスをきているお嬢さんを一緒にしても決して対立はないんです。その日本人のうまさですか、変化と伝統を合わせるということが、日本の政治の、また日本の社会のひとつの強みであったと言えるでしょうね。

大平 日本には、革命の歴史はなくて、維新があった。エボリューションの歴史はあるけれどもレボリューションはなかったと。言いかえれば、完全な断絶というのはなくて、依然として昨日が今日に継続してますね。それがまあ明治維新もそうだったし、昭和二十年の敗戦の時もそうだったし、溯って大化の改新とみんないますけども、あれは、少なくとも革命ではなかったということで、これは、日本人の知恵として非常に評価していいことではないかと思うんです。

しかし、人によつては、日本人のなかに革命性がないわけではなくて、さうとう鋭いものがあるのだ、という歴史家もおります。歴史のなかにはさういう動きは見られなかったけども、さうとうあったことはあったのだ、ということをする人がありますけど、先生はどう考えられますか。今後もさういう断絶を防いで、革命を避けて、日本というのは維新を全うできると思われますか。

社会的平等早くから

ピタウ 私は、さうでなければならぬと思いますね。そして今の政治の動きを見ても、い

つも弾力的な順応性といひましようか、それを保つならば……まあ革命で行われることが平和的に行われたら最高だと思ひますね。そして、日本人の性質にその弾力性があると思ひうんです。

大平 なるほどね。

ピタウ ふしぎなことに、外国人が日本にくる時に、最初の印象として、日本人はみんな平等であると。まあ服装も、だいたい同じような着物をきているし、また文化的なレベルもあまり差はないんですね。そして貧富の格差もそれほど激しくはないですね。まあ日本人でさえも、九〇%以上中間（産）階級であると言っているわけです。その革命は、おそらく明治五年の学制によるものであるかもしれませぬ。政治的な平等の革命はその時まで行われなかつたかもしれないんですが、しかし、社会的な平等の革命は、ヨーロッパよりも早かつたんです。その点が日本人の一つの特徴でしょうね。

大平 われわれが小さい時の農村社会で考へてみましても、平等という観点からいうと、地主と小作と言うのは、さうとうの開きがありましたね。ありましたけれども、それでは、生活の実際において非常に違つていたかという、地主の方々も非常に質素な生活をされて、それからノーブレス・オブリージュというのですかね、公共のために、村のために事あるご

とに自分がコントリビューションをやりまして、それで実際は非常につましい生活をされているのですね。それだからそんなに違和感がなかったのですね。断絶がなかったように思っています。

ピタウ 対立はなかったでしょうね。

大平 まあ、私はその当時の都会のことはよく知りませんが、戦前、若干東京の生活をやってみて、なるほど、資本家というようなものが日本にも若干の芽生えがあったと思うし、一つの財閥ファミリーというような所有の点からいうと、そうとう目立ったものがあったと思いますけれども、しかし、彼ら自身も、どっちかという田舎の地主さんと同じで、そんなに民衆との間に違和感があつたように思いませんね。その点は、比較的よかつたように思いますね。

ピタウ たぶん儒学的な影響もあつて、金で身分を得られることはないのですね。日本の伝統で、やはり社会に奉仕するというところ最高の身分である……。

大平 そうですね。だから、日本人は、エコノミック・アニマルだとかいう外国の方々もおりますけど、私どもそう思えないんで、日本人というのは、金をためること、金を持つことをそんなに尊い価値、高い価値、値打ちがあるものとは思っていませんですね。

ピタウ 私も、その印象で、たとえば、アメリカのような資本家、ロックフェラーとか、そのような人は日本にいませんね。

大平 そうですね。

ピタウ 金がもうかたら社会、国のために使うというひとつの伝統があると思うんですが……。

大平 しかし、これは褒めていいことかどうかわからんけれども、たとえば、江戸っ子は宵越しの金を持たん”とかね。あれは貧乏人になるほどまた気前がいいんですね（笑）。それで、明日はどうなるか、まあ明日は明日の風が吹くだろうというようなことで、意外に楽天的なんです。それで気前よく他人に分かってやりましてね。

そういうところは、先生は、まあヨーロッパのご出身ですけども、ヨーロッパ人のほうが、生活は非常に手堅いように思いますね。日本人のほうが、比較的そこはぞんざいのような感じがしますが。

ピタウ そのようなことは……（笑）。

世界へ出ていくべき時代に

ピタウ 話題を変えて、私の一つの希望として、これからは、国内のことを考えないで、ほんとに広い心で世界のことを考えなければならぬ時代が来たと思います。明治維新から今まで、追いつき追い越せという政策で、たいへんだったですね。しかし、もう追いついて追い越したんです、周りの国々を。

そして、こんどは、先生が前におっしゃったノーブレス・オブリージ。それは今まで日本人に対するノーブレス・オブリージだけだったと思いますが、これから積極的に（世界に対して）身分から出てくる役割を果さなければならぬんです。ただ、経済大国ではなく文化的な大国と「して」。あるいは援助の面で、ほんとうに積極的に、政治あるいは経済援助の大国にもならなければならない時代にきている、という気持ちですが……。

大平 それはそのとおりですね。私、今ちょうど自民党の本部で青年の講習会があつて、一時間講演してきました。だいたい今までの世界が、まあ今でも、主流派というか、やっぱりヨーロッパ系統の方々がリードするとうか指導する「とうか」というか、そういう世界で、われわれは、いわばアウトサイダーですね。中国のようにもう超然として、われわれは世界であ

る」といふ、余人を寄せつけない、ひとつの主体性をすでに身につけておつた民族もありましたけれども、日本民族というのはだいたいヨーロッパ人の世界のアウトサイダーとして、まあいわば蚊屋の中に入れないで、蚊屋の外で、世界はヨーロッパ人がやつておるんだから、そんなところへわれわれがあまり口ばしを入れなくてもいいんだということ。また、だいたい皮膚の色も違ふし、脚は短いし……。

ピタウ いや、今は長くなりましたよ。

大平 不器用だし、言葉はへただし、もうあんまりそんなところへ出しゃばらないでもいいではないか、という気持ちの一つ。それからまた、事実そういう力もなかつたんです。世界に對して与える力——受けるほうはさうとう貪欲に勉強しましたけども、まだ与えるなんていう力はないものと思つていたけれども、私は戦後、とりわけこの十年余りの間に、日本は自分でさうとう力を持つたと思ひますね。

經濟小国ではなくて、經濟大国になつた。それで先ほども数字でもつて示したのですけども、一九六三年に、自由世界だけを見ても、アメリカ經濟の持つシェアが四〇・二五から、一九七七年に三六・九、日本は五・四八から九・一四になつたんですね。二倍近くになりましてね。アメリカは少しシェアが落ちてきましたし、ヨーロッパ各国は、押しなべてシェア

が微減しているのです。日本と第三世界だけが上がっているんです。

これは、棚ぼたではない。日本という国は、世界にとつて、世界の経済を支えている大きな力になったということだから、これは、その力量にふさわしい責任を果たさないと……日本がそうなったというのは、諸国民の理解と信頼と協力があつたからそうなったんだから、今後はいつそうそうでなければならぬ。日本は、世界のルールをまず率先して守るべきだし、それから世界に事ある時には、真つ先に奉加帳に一筆書かなければならない責任があるのではないか。そういうことを、今、若い青年たちに話してきたところでした。みんな、へえー、そんなになつたんですか、というような顔をしていましたけどね……。

ピタウ 今まで国の発展、そして戦争の失敗があつたんだから、二度とそのようなところに入りたくはない、という気持ちもあつたでしょう。しかし、もう西洋の世界は終わつたと思います。もちろんまだヨーロッパ、アメリカは大きな影響を及ぼすでしょうが、しかし、それが西洋と非西洋との間の橋渡しの役割りを果たさなければならぬと思うんです。日本は、そこで自発的に独得の政策を打ち出すならば、これからの国際人は、たぶん日本人だろうと思います。西洋のこともよくわかっている。場合によっては、私たち西洋人よりもヨーロッパの歴史とか、アメリカの歴史をよく勉強なさっているわけです。

大平 アハハ、そうでもない……。

ピタウ 反面に西洋人ではない。非西洋文化圏のこともわかっておられるわけです。そこで、もう少し積極的にその媒介の役割りを果たせると思います。私は、ほんとに大きな期待をそこにかけているわけですがね。

大平 そうですね。もうそろそろ出ていつてちつともふしぎでない時代になってきたと思いますね。

対外援助と国際化教育

ピタウ そしてみんなから信頼されると思います。積極的に一つの政策を打ち出したら、日本は、もう軍事力で他の国を侵略したりとか、そんなことは全然ありません。そして防衛のことでもいろいろなことを論じられているんですが、「いや、私たちは防衛にあんまり金をかけません。しかし、対外援助のために金をかけます」と、強い声でいつていいと思うんですね。

そして、日本は、今の難民問題を見ても、あるいは国際文化交流を見ても、そんなことを

どんどんやっておられるわけですから、こんどは世界に向かって積極的に「いや、これから私たちの番だ」と言っているいかもしれませんね。

大平 このごろ難民問題でも、国連の難民対策に日本はそうとう出しやばって、「半分ぐらいは持ちましょう」ということで、気前よく出しておるんですがね。ところがこれに対して、国内でそう批判がないんですね。少しやりすぎじゃないか、出しやばりすぎじゃないか、という声は、どこにも出てこないんですね。これは、やはり、日本人は国際的な責任を果たさなきゃいかん、という自覚は、だんだん出てきておるんじゃないでしょうかね。

ピタウ そうですね。日本人は、初めてこの難民問題を自分の問題にして、政府をはじめ、また民間ベースでも積極的に援助を出すようになったわけですね。

私は、これからたとえば文化の面でも、いろいろな公立大学あるいは私立大学は第三世界の大学と協定を結んで、そして今までの日本の体験をそのまま向こうに伝えるということはどうできないんですが、しかし、向こうの国々の発展のために役に立つような講座も設けたらいいと思うんですね。

大平 そうですね。

ピタウ そこは、教育の問題になるんですが、教育の面で、もちろん日本は、世界で最高の

成長を示していると思いますね。九年間も義務教育で、そして高等学校に進学している者は、九四パーセントですから、もう最高ですね。そこは、これからもう少し国際化時代のための教育……言葉の面で私はあんまり心配しません。英語の力はわりあいによくなりましたね。

大平 そうですかね。

ピタウ 他の国と比べても、全然劣らないですね。

大平 そうですかね。われわれは、これ、もう本質的にだめかなあと思った。

ピタウ いやいや、とんでもない。ほんとうに大きな進歩がございました。だから、言葉よりもこんど意識ですね。日本と世界ということではなくて、私たち日本人も世界の中だと。私たちの文化も世界に紹介しなければならぬ、と思う若者たちがたくさん出れば、国内だけではなく、世界的な役割りも果たせるんじゃないでしょうかね。

パターンを世界に示せ

大平 日本の文化というのも、これは、世界の特異な一つの財産ですわね。

ピタウ ほんとうですね。今までももしろい言葉で「日本には日本文学はない」と言われているんです。国文学があるんです。国語、国技——いつも自分の国のものとして考えているんです。これからは、やはり、日本の文化も世界的な文化遺産の一つの部分であるのだから、そのよい点を世界に紹介しなくてはならないという気持ちを持った若者たちが出れば、もう少し外交の面でも積極的な面が出るのではないかといいことですね。

大平 率直に言って、日本が国際的に世界に出ていかなければならない。もう少しお役に立たなければ、もつと溶け込まなければという意味ですね。

日本人は国際人

ピタウ 国際性の面でも、大きな進歩、発展がございました。たとえば、日本にこんなに多くの外国人がいて、日本語が全然できないのに生活がどうしてちゃんとできるか。まあ日本人がやはり英語もできるし、また国際人だからですね。そうしないとできませんよ。

大平 親切で温かみのある民族ですね。

ピタウ たびたび言われるのですが、外国旅行に出ると、盗難事件とかいろいろな問題が

あつて、日本に帰ると、もうほんとにいいなあと、外国人もそのような気持ちで日本を褒めているんですね。結局、誠実で、そしてほんとうにオネストですね。

大平 ただ留学とか海外旅行も、もう少し準備をして行けばいいんだけども、すぐもう「それじゃちよつと行つてこようか」というわけで……。

ピタウ まあ、連休などにはね。

大平 スーツケースを持つてすぐ飛び立つから、あれちよつと行く先を少し勉強されて行くど、よほどいいんじゃないか。せつかく貯金をためて（笑）、外貨を払つて海外に行く以上は、それだけのものを身につけられたらいいと思うんです。

ピタウ それほんとうですね。もう一つ、帰国子女を活かすということ。

彼らもほんとに国のためにすばらしい貢献ができるんですね。これから主に高等学校、大学は、その帰国子女の問題も真剣に考えるべきでしょうね。

大平 そうですね。そして外国の人々とごく自然に、素直な気持ちで付き合つて、友遠方より来たる“というようになつて欲しいと思つて……。

ピタウ 今日はほんとにありがとうございました。

形正しければ影曲らず

対談者 円覚寺派管長 朝比奈宗源

『ファイナンス』（76年6月）掲載。『全著作集』6巻（講談社）に収録。
三木内閣大蔵大臣時代の対談。朝比奈宗源は、1881（明治24）年生まれ。昭和期を代表する臨濟宗の禅僧、臨濟円覚寺派管長を務め鎌倉円覚寺の住職であった。古き良き時代の日本精神論を政治と宗教を中心に、いま話題の大河ドラマ「鎌倉殿の13人」主役の北条義時の故事にまで触れて熱く語っている。本号のテーマに照らせば古いどころか「いざ鎌倉」である。

レーニンは大偉大な実践家だった

朝比奈 あなたはまだ若いんだらう？

大平 いやいや、もう六十六です。

朝比奈 でも、わしと二十違う。わしは昔流に言うとお八十六、満で言うとお八十五だ（笑）。ロシアの革命が起こったのが、もう六十年前になったね。あのころは私も若かったし、ぶらんロシアのことに興味も持ったし、心配もした。わしはレーニンを非常に崇拜してね。あの人は人柄がちよつと乃木（希典）さんみたいで、非常に己に奉ずること薄く、厳しく、それで他人には寛容で、ともかくもケレンスキーなどがしくじったあとをまとめた人だからね、実力もあると思つた。そんなことでね。

安倍能成さんが、まだ慶応の哲学の先生だったころ、私が最初に鎌倉で持った貧しい禅寺へひよつこりと来たことがある。暗い部屋の私の机の上に、レーニンの小さい写真が置いてあつた。それを見て「ありゃ」と言うから笑つていたら、「レーニンじゃないか……ふうん」とうなつていた。あとになつて彼もちよつと偉くなつてから、「鎌倉の朝比奈さんの部屋でレーニンの写真を見たときは驚いたよ」と、何べんも言つていた。彼も、文部大臣をしたり、学習院の院長でしたが、亡くなつてしまつたな。

大平 そんなことがあつたんですか。

朝比奈 あんたも額にしわがあるな。わしは三十ぐらいからあつた。だから、わしが袈裟をかけて、威厳を少しつくつて撮つた写真を見ると、自分でも全く驚くほど、レーニンとよく

似ている感じがしたんだ——レーニンというのは、わしのような三角の貧相な顔だからな。そのくらいだのに、最近発表されたアンドレイ・サハロフの『わが祖国』——原名は『わが祖国と世界』だが——を読むとがっかりするな。人間のすることというものは、しようがないものだな。

大平 レーニンの伝記が、このごろたくさん出るようになりましたね。それを読んでいますと、レーニンという人は大変な実践家だと感心しますね。

朝比奈 うん、彼は実践家だ。

大平 あれがたいていの人だったら、途中で挫折して、もう革命をやめてしまっておると思いますね。ところが、あの人は最後まで捨てずに仕上げた。そのやり遂げた実践力というのは大変なものだと思いますね。

朝比奈 私もそれを買うね。何て言ったって、理論だけじゃ本物にならんわな、あすこまでやってみなきゃ。しかし、レーニンも地下でがっかりしているのじゃないかな。あれだけ彼が苦勞してやっても、結果がサハロフの書いているようだね。あれは歴史の大きな教訓だよ。日本人はとかくおつちよこちよいで、惚れやすく冷めやすいところがあるんだが——それとちよつと違うかもしれないが、我々の若い時分には、よく青年時代に社会主義にかぶれ

ないようなやつはぼんくらだ、三十過ぎてもやってるのはどうだとかいうようなことが言われたね。わしなんかでも、初めはかなりシンパ的な気持があつたが、年とともにだんだん冷静に見るようになった。

名君は賄賂を厳しく自戒する

大平 そうですね。日本でもこのところ、そういうことに対する見方が大變肥えてきましたね。今度、ロッキード問題が起きて、野党の皆さんが、これは構造的な汚職だ、保守政権にまつわる、また、アメリカと日本とを巻き込んだような構造的な汚職だときめつけている。けれども、日本には自由があり民主主義が発達しているから、ああいう問題が起こると、摘発され国民世論の批判を受けることになる。これが一部の者が権力を握り自由な批判を許さない国だと、体質的に構造的汚職が発生する土壤を持ち、また、いったんそういう問題が起こっても知らされないままに蓋をされたり、自由な批判を許さないということで、ますます腐敗を培つちかっていくということになる。そういう意味でも、自由というのは非常に大切なことで、民主主義を健全に育成していく基本になる。日本の現在の制度ややりかたは、腐敗を絶

えず摘発し、浄化していくものだと思いますね。

朝比奈 そういう意味では、東洋は西洋より清潔だと思ふんだね。東洋でも専制主義の国家においては、当局者の権力というものは、今の全体主義国の首脳部に劣らないくらいのもものはあつただろうが、賄賂をいかに戒めたかというのは、例えば中国の古い時代だが「苞苴盛んなるか」と言つて、自分の政治の間に賄賂が行われているかどうかということを厳しく責めている皇帝がいる。権力の座にある者は、下の方のおべつかや賄賂を非常に自戒している。これはもう名君とか、賢臣とか言われるような人の基本的な道徳だった。日本の官僚は清潔だと思ふが、常に身辺には気をつけ、自戒の心を失わないでもらいたい。

大平 確かに東洋と西洋とでは、だいぶ感覚も違うでしょうね。

朝比奈 アメリカあたりじゃ、コミッションとかいって、一億の取引をすりや、五百万や千万はやつても当り前だというようなことらしいじゃないか。

大平 日本では、普通の社会生活においても商慣行においても、チップとかリベートとかコミッションとかいうようなものが殆どなかった。そういう日本語もないんじゃないでしょうか、全部外来語です。ところが世界が狭くなり、だんだんそういうものが日本にも普及してきた。そこで健全な庶民感覚からいって、そういうものがどこまで許されるかということが

問題になるが、その判断は実のところ非常に難しい。庶民感覚の許す範囲内できちんと節度が保たれておれば、そのことは社会生活で潤滑油になる面もあるでしょうが、これが度を越して、しかも慣行化してくると、それは問題でしょうね。

朝比奈 私が若い時、こういうことで失敗したことがある。それは、あるアメリカ婦りの女性に、私にお礼をするつもりで裸で金を出したんです。人から裸で金をもらったことなんかなかったから、わしは内心失礼だと思つてね、困ると言つて断つた。そうしたら、自分を侮辱したといつて、その人が腹を立てたのには、わしは驚いたね。その人は有名な人の妹さんだったが、やっぱり習慣の違いだということをしみじみと感じたね。

大平 同じ東洋の国でも、日本では、残念ながらロッキードという問題が起つていますが、よその国と比較すれば清潔だと言われますね。私が外務大臣であつたときに、ある東洋の国の要人がこられて、日本という国は非常にうらやましいと言うのですね。どこがうらやましいのですかと聞いたら、公務員が清潔だと言うんですよ。

朝比奈 そりゃそうだろうね。

大平 彼が言うには、日本の国が今日あるのは、結局、公務員のモラルがこのようにきちんとしておるからだと言うのです。だから、薄給に甘んじてきちんとやっている公務員を大事

にしていただきたい。私の国は、どこから手をつけていいのやら、上から末端まで汚染されてしまっていて救いようがない。全く日本がうらやましい、と言うんですね。

あるべきようは、と七文字の仮名

朝比奈 そういう日本的な道徳的伝統は、官僚の訓練でも、まあ平安朝のことは知らないが、鎌倉期からあとはかなり組織立ってやっているからね。鎌倉期というのは、そういう意味でも大した時代だと思うね。例えば北条泰時だが、彼の儉約、綱紀の肅正は立派なものだね。執権はいわば総理大臣だが、それでいながら、四人かでやる宿直を三十年間、怠らず自らきちんとやった。また、一つの帽子を三十年間かぶるというくらいに、彼は質素な生活をしていった。

泰時についてはこういう話がある。父の義時が死んだときに、その遺産を全部きょうだいに分けてしまって、自分は少しも取らない。それで、伯母の政子が心配して、「おまえは執権として立つのに不自由じゃないか」と言って注意したら、「いいえ、私は何十年も部屋住みでやってきたので、私生活は十分に足りません。父も、死んだあとはきょうだい達のことを

案じたと思うから、私はできるだけ彼らにやったんだ。私が入用となれば、それは天下のために入用のときだ。天下のために入用のときは、天下の富を挙げて使うから、あなたのような心配をする必要はない」と。今で言ったら、公的に必要なことは国の予算でやるからいいということだが、こういう立派な態度で処していた。

大平 政まつりごとに当あたっては、全くそういう態度で処することが必要ですね。いま自民党は、ロッキード問題で国民の疑惑や批判を受けているわけですが、こういうときには全員が禊みそぎ（罪やけがれをはらうために川などで水を浴びて身を清めること）を受けるような気持で、国民の信頼を回復することが必要だと思っているんです。

朝比奈 そう、そこで泰時は、川端康成君がノーベル賞を受賞したときに引用した梅尾の明恵上人の教化を受けた人ですが、あるとき明恵上人に「私は将来天下を支配しなければならぬが、何を心得とすべきか」と尋ねたら、上人は「欲を去れ」と教えた。泰時が「私はやれましようが、下の者までそれをさせることは……」と心配した。そうしたら明恵上人の言葉は、「形正しければ影曲らず」と、上に立つあなたがきちんとすれば、下はついてくる、そんなことを心配する必要はないと言ったんですね。実に明快なものです。それから「あるべきようは」というわずか七文字の仮名で、お互いがあるべき姿を守ればいい、そうすれば

必ず天下は治ると書いて与えたんです。それを実行したのが、鎌倉幕府の基礎を固めたあの時代ですね。のちに元が攻めてきた時、時宗が戦って勝てたけど、それはみんながそういう姿勢で政治をやって、あの時代の国民の支持を深くとらえていたからです。だから、あれだけの難局を乗り越えられたのですよ。やはり上に立つ者には、そういうことが一番大事だと思う。正直に、また、できるだけ質素にね。

大平 全く同感ですね。私は外務省や通産省、大蔵省と大臣をつとめてきまして、まず何を見ていたかというと、私どもは毎日限られた幹部にしか会えませんが、各局に責任を持つている局長、部長、そういった諸君に会うわけですが、その人たちの顔をじっと見たわけですよ。そうして、きょう彼は非常に明るい顔をしている、何にも屈託のない陰りのない顔をしている、そこでああこの局は大丈夫だ、うまくいっていると、そういう見当をつけたんです。

朝比奈 それはいいことだ。

大平 今まで私は各省を回ってきましたけど、大体、日本の役所は明るいですよ。暗いところがない、その点是有難いと思っっていますね。

朝比奈 そうだろうね。それがロッキード事件みたいなことが発生していたら、そうはいかない。

「日本人は死んだ」のか

朝比奈　ところで話とはぶが、最近政府の方でも関係が深くなっているアラブの国、あそこはマホメット教なんだが、このごろ私どもの方へも連絡をしてくるんだよ。彼らは明快なことを言うね。我々のイメージに合う尊敬すべき日本人は、今のような日本人じゃない。明治維新当時の、二千年遅れていた国をわずか百年足らずで追い着き追い越せとやった、あの意地のある純粋な日本人だと。しかるに今の日本人は、もうそういう日本人じゃないと。イスラエル系のトケイヤー氏が最近書いた『日本人は死んだ』という日本の思想や教育についての本を見ても、明治維新を築いたような日本人はもう全部死んだと言っている。私は、今の状態では、そう言われても仕方ないと思う。ともかく今の日本人は甘いですよ。あなたもお読みになっただろうが、イザヤ・ベンダサンが書いた『日本人とユダヤ人』という本の中でも言ってますね、日本人は過去があまり恵まれ過ぎて根性が鍛えられる時がなかったから、全部甘いと。これが実につらいけれども、当たっていると思う。

今の日本人は、政治思想、イデオロギーの問題を実にあいまいにしています。この非常に重要な原理原則をはっきりさせないと、政治だって安定しませんよ。日本の国で共産主義を

国是とするのいいか悪いか、ということすらはつきりさせていない。お互いに相手がなんだかよく分らないでもって足のひっぱり合いをしているような、こんなことをやっていたつてしようがないな。日本人が甘いと、結局日本人がそれが何か分らないうちに、いろいろな外国の思想につけ込まれますよ。何が日本人にとって最もよいかという、原理原則ははつきりさせなきゃいかん。

大平 やっぱりキリスト教圏にはキリスト教という譲りがたい原則があるし、アラブの世界はアラブの世界で、毎日、時間が来たら何を犠牲にしても礼拝するような譲りがたい原則を持っていきますね。どこの国もよって立つ原則がきちんとしているが、日本はいまご指摘のように原則を見失っていると思う。日本人は、ええじゃないかええじゃないかで、安易な妥協をするとところがある。対内的にもそうだし、対外的にもそうで、バックボーンのないくらげのような国になってしまったところがありますね。国がよって立つ基本がはつきりしていない、嵐に耐えてこれが日本人だと示すものを持っていないということですね。これは、おっしゃるように、えらいことだと思えます。今から原則をもう一度見直す、我々の先祖が持っているものはいったい何だっただろうかということを見直して、よいものを発掘して、これを世界に顕示し、我々がそれをきちんとして持つて生きていくということをしなければいけな

い。今は、そういうことが一番大事な時ではないでしょうか。

二度にわたるバチカンの決定

朝比奈 私は宗教家ですから、ちよつと宗教の話をすると、仏教という因縁という法則ね、これは一口で言えば、全部が条件によつて変化するという考え方で、実は極めて科学的な思想なのです。これによれば、日本がこのようになったのには、そうなるだけの条件が内面的にも外面的にもあつたわけで、我々一人一人が特別に責任を持つということはできないんですね。できないが、しかし、また一人一人が自覚する以外にない、この点ですよ。いま日本人の若い方々が日本の進路をどうするかというのには、結局二本の道、つまり自由主義の路線を貫くか、進んで専制主義ないしは全体主義の道に入っていくかという、この二つの選択になると思う。これは、非常に重要なことですよ。ここに、日本人の自覚がかけられる。

私は、日本のいろいろな宗教団体と一緒になつて平和運動を進めています。カトリックもこれに加つていますね。四年ほど前に平和大会を伊勢で開いたときには、バチカンの駐日大使もローマを代表して、初めて正式に日本の宗教の集りに参加した。そんなわけで、

我々は仲間のようになっているわけだが、我々の共通の認識はね、世界は結局、宗教を全く否定するイデオロギーと、宗教を肯定するイデオロギーと、二つに分れて対立しているといふことです。

今から十一年前に既にローマではバチカン会議で、九百十一年間も絶交しておったギリシャ正教とローマ教会が握手した。そして、オール・キリスト教で共産主義対策を練った結果、カトリックの信仰をもつてすれば、共産主義もやがて抑えて融和できるという自信を持った。大した信念だ。私の近くに鈴木大拙さんが住んでいました。私がこの情報を聞いて「えらいことをローマは決議しましたよ」と言ったら、「本当か」「本当です」「そんなことをしてカトリックがもつかなあ」と心配していた。だが、それから法皇（五）は二代代（五）つていまます。この二代とも一生懸命、国連へ行つて平和講演をして歩くような人達です。この十年間に、カトリックはどんなイデオロギーとも共存しようと随分努力してきました。しかし、昨年の暮にローマはついに腹を決めている。日本の新聞はあまり伝えませんでした。が、昨年の秋、南ベトナムで大変な数の宗教者が死んでいる、仏教も、カトリックも、ほかの宗教も。行方不明が二十五万人とか言われている。

そういうことがあったからだと思いますが、昨年の暮には第二回目のバチカン会議をやつ

て、十一年前の決定を取り消して、一人の人間がクリスチャンであると同時に共産党員であることは絶対に不可能だ、という結論を出した。もうだめだ、妥協はできないということ、対決を決意したんですね。

そこで、十字軍以来千年近くも争っていたマホメットとの間も、全面的に宗教を否定するイデオロギーが出てきている以上は、我々が兄弟で争うのは愚劣だ、手を握ろうと。二月一日から六日まで、ローマの代表十四人とマホメットの代表十四人が一堂に会して討議して、二十六か条の協約みたいなものをまとめて、宗教連盟のような準備をしている。この二十六か条に対して、ローマでは二か条だけ少し待ってくれと言って、大体は合意したらしいです。

自由を奪われて自由の尊さが分る

朝比奈 宗教の話は別としても、日本人にはベンダサンが「日本人は安全と自由と太陽と水とは、^{ただ}只だと思っている」と言っているような甘さがあるから、全体主義とか専制主義的な思想の攻勢に対して認識が甘いし、もういところがあるのでしょうね。

大平 うーむ。私はね、日本人が原理原則に弱く、古い日本人は死んだと言われているようなところはあるけれども、しかし、日本人はそんなに脆弱ぜいじやくな民族ではないと思うんですよ。そういう日本人に対して、日本の各政党もいろいろと対策を考えてやっているわけですが、日本人は大きな歴史の流れの中で、結局は正しく判断して行くにちがいないと思ってるんです。

朝比奈 はじめにもちよつと言ったが、サハロフが最近書いた『わが祖国と世界』ですね。あれには全くわしの腹にこたえるようなことがいろいろと書いてある。あんたも読むといい。結論を言うとね、サハロフは自分の祖国はまことに悲しいことになったと書いていますよ。いま権力の下敷きになっている下層民は、その苦しみを訴えるところがない。その苦しみは、王朝時代の比じゃない。思想の自由を認めるの、表現の自由を認めるのと言って、信用できないと言う。このような宣伝に自由主義の人達がうっかり乗ってもらっては困る。自由主義では、みんな意見をもって自由に発言しているから意見の一致が容易でないが、どうか自由主義の立場だけは結束して守って欲しい、それが人類の将来に光明を失わないゆえんだから頼む、と言っているんですね。そして、彼がその一行々々を書くのにも命を懸けていることを知ってくれ、と言っている。

ソ連から追放されたノーベル賞作家のソルジェニーツィンも、自由の尊さは自由を奪われ収容所に入れられた国民でなければ分らない、と言っていますね。だから、我々はよく目を開いて真の自由主義を守っていく決意を持たなきゃいけない。

多彩なオーケストラのような政治を

大平 本当に、自由の尊さということを日本人はもつと自覚しなければいけないですね。私はさつき日本人はそんなに無原則でも脆弱でもないと思うのですが、いま日本の各界では、日本における原理原則というかユニークな日本のものとは何だろうか、ということの発掘が始まっていると思うんです。例えば政治の世界でも、日本の政治はどういう原理原則でやってきたんだろうかということを「いえ(家)」中心の考え方などに焦点を当てて、学者を初めいろいろな人が日本の歴史を通じて発掘を始めていると思うのです。日本の経済でも、単なる合理主義かと言うと合理主義以上の何かがあるのか、日本の経済思想の中にはあるのか、とか、というようなことをみんなが勉強を始めているし、そのほか多彩な文化の世界でも、一概に捨てることのできない貴重な遺産があると思いますね。

そういう中で、いま老師がおつしやるように、全体主義とか特定のイデオロギーの攻勢があるわけですが、それでは、それに対して日本人の抵抗が非常に弱くて、朝に一城、夕に一城と落されているかと言うと、私はそんなに日本人がもろい民族であるとは思わないのです。自由主義とか民主主義というのは、本来その中にあらゆる思想なりイデオロギーを包含し、消化し、自由な討議を通じて、健全な国民の選択を重ねていくものです。時にはがゆいと思われることがあっても、終極においては私は日本人を信頼しているのです。特定の価値観を持った調子の高い主張を一方的にがむしやらに押しつけようとしても、日本人には何かそのようなものを拒否する精神があるんですね。私は、やっぱり政治というのは単調な音楽で片づけるのではなくて、多彩なオーケストラのように、いろいろなものを組み合わせた重量感を持った、しつかりとしたものでなければならぬのではないかと思うのです。そうして、それをどういふふうにして出すかに苦心していくものではないか、と思うのです。

その際、みんなでもう少し自信を取り戻して、我々の文化的土壌の中にあるよきもの、値打ちのあるもの、強いもの、そういったものをもう一度発掘し、それを誇りにし磨き上げて、子孫に伝えていくようにしないといけないのではないか。また、そういうことを現に営々としてやっている諸君は多いわけですから、そういう人達を励まし広めていく気風を各

界で起こしていききたいと思ひます。

青年に個性と面魂、義務と責任を

朝比奈 確かに日本民族はよい面を持つている。世界に例のない二千年の平和な歴史を持つ日本ですから、わが国民の理性的鍛練の不足からくる根性の甘さは悲しいが、その一面、人のよさ、純情で他人と自己との区別を忘れるような童心、若々しさなどは、他の先進民族には見られない特徴で、ひいき目に見れば民族そのものの若さでもある。若さには未来があり、過つても改め得る可能性を大きく持つているからね。しかし、私は最近の風潮を見ると、経済の高度成長の波に乗つて起こつたのかどうかは知らないが、生活は贅沢に、風俗は華美になり、わが国民の長所とされた質実剛健の風など地を払つて尽き、殊に青少年の精神面の懦弱化には絶望的なものすら感じる。

昔からその国の青年を見ればその国の将来を占うことができると言うが、現在のわが国には、個性的な風格と、いかにも気力の漲つた立派な面魂を持った青年が本当に少ない。これは社会に対する義務や責任の觀念、公共的なものに奉仕する精神などを全く教えない戦後の

教育方針の弊害が大きいと思う。具体的に言えば、戦前に教えた誠実とか、信義、義務、謙虚、節度、勇氣、博愛といった道徳を再び取り戻し、今日の自由主義や民主主義をはきちがえたエゴイズムの、放縦の生活を百八十度転換して、自己規制をもっと厳しくすることが必要だな。

大平 国家に対する義務などと言うと今の若い諸君は嫌うでしょうがね。しかし、中国やソ連の教科書には、むしろ明治の教育勅語と同じような、祖国愛とか勤勞の尊重とか、勇氣、親切、報恩とかいった道徳がはつきり示されているようですね。

朝比奈 アメリカでもフランスでもみんな同じですよ。日本だけが何も主体性のないものになっていいる。だから、わしは戦後の教育を奴隷教育と言うんだ。個性的な心のある青年を育てないようにしていると思えない。しかし、結局は指導者ですよ。要するに指導者に毅然とした精神が失われ、国民の精神が萎びているんだ。例えば石油ショックの時もそうだと思う。日本は石油ショックに襲われたって相当の経済的実力を持っているはずなのに、まるで「右や左の旦那さま」ときよろきよろしている乞食のような態度は何だろうね。

より高い連帯価値に向かつて

朝比奈 日本の最近の精神的風潮を見てみると、ともかく今後の日本を滅ぼすも救うも今だと思ふ。大平さん、あんたもこれからの日本を引張っていかなきゃならん人だ。お願いしなすよ。どうかひとつ腹を据^すえてやつて下さい。わしはどうも口舌の徒にとどまる人物は信用できない。やはり信念を持って実行する人物でなきや。

大平 いやあ、どうもだいふ叱^{しつ}陀^たされましたな（笑）。私はかねてから、今のような平和と豊かさの中に、分別を持った連帯感の横溢^{おういっ}した人間をいかにしてつくり上げていくかということが、政治の最大の課題であり、教育の基本的任務でなければならぬ、と考えているんです。そのためには、自他に対する甘え、無気力、無関心、絶望あるいはエゴイズムを退け、より高い連帯価値に向かつて、我々の内なるエネルギーを引き出すことであると思つております。

わが国民は老若男女を問わず、社会的な価値の創造に参加し、真の生きがいを見出したい願望に駆られていると思ふんです。特に青年は常にそのような自己の実現の機会を求めたいと思ふんですよ。いま若い人達でも、いろいろな分野において創意工夫に富んだ仕事をし

ている人達はたくさんいるわけですね。学問の分野でもそうだが、企業でも農業でも芸術の分野においてもそうだ。将来に夢を持たない、今の生活に張合いや生きがいを持たない若い人も多いが、それは我々の責任で、若い人達がそういう夢と生きがいを持つような社会をつくっていききたい。

ただ、政治家もあまりに身辺が忙し過ぎる。少なくとも総理や閣僚は、もっと時間的に余裕を持って、落着いて読書もし演劇も観るようにしないとイケない。最近、革新政党を支持する文化人も多いようだが、総理や閣僚としては、そういう人達ともゆつくりと話し合つて、国民は真に何を求めているのかを知り、そういう国民の希求にこたえらるとともに、将来の指針を引き出すような政治をしないとイケない。そこに私は、政治家としての重い役割があると思うのです。

国際政治家としての大平正芳（前編）

渡邊 昭夫（東京大学名誉教授）

『大平正芳 政治的遺産』（大平財団1994年）所載。『21世紀を創る—大平正芳の政治遺産を継いで—』（PHP研究所2016年）に転載。渡邊昭夫先生は東京大学・青山学院名誉教授。第3代大平正芳記念賞運営・選定委員長として長年ご指導を頂いた。紙幅の都合で後編は次号（13号）に掲載予定。ウクライナ問題への対応は感情的一過性であってはならない。国際的視野のもとでの長期的覚悟と信念が求められる。本論をそのための糧にして頂ければ幸甚。

はじめに

戦前の著名な外交・政治評論家の清沢冽に『外政家としての大久保利通』という名著がある。清沢が敢えて「外交家」と言わず「外政家」という言葉を使ったのは、いわゆるディプ

ロマットというよりも、実質的には国の最高レヴェルのステーツマンである大久保利通が、対外的な問題の処理において發揮した手腕を通じて、その国際政治家としての姿を描き出すためであった。清沢がそこで具体的に扱っているのは、台湾出兵の事後処理の使命を帯びて自ら全権として北京に赴いた大久保利通の、一八七四年八月から一〇月までの三か月にわたる清国政府相手の困難な交渉の経緯である。^① 私がここで「国際政治家」としての大平正芳について書こうと思うのも、それと少し似ている。とは言え、大久保からほぼ一世紀遅れて一九七二年と一九七四年の二度にわたって北京で行われた日中交渉における大平正芳の姿を描くのが、ここでの趣意ではない。なぜならば、後にも述べるように、たしかに、この二度にわたる北京交渉は、大平の政治家としての業績のハイライトであることは間違いがないが、国際政治家としての大平正芳を描くには、もう少し広く、その政治家としての経歴の全体を観察しなければならないからである。

大久保にせよ伊藤博文や井上馨や大隈重信にせよ、総じて明治の政治指導者は、狭い意味の内政家ではなく、国際問題をも処理できるだけの見識と力量をそなえたオールラウンドのステーツマンであった（大久保が右の北京交渉の全権たることを自ら買って出たときの彼の政府での地位は内務卿であった）。相互依存の密度の高くなった今日の国際社会において、

しかもその中で世界の富の一割を生産する「国際国家」となった日本において、政治家としての評価は、国際的な通用性を基準としてなされねばならない。いつの時代にあつてもそのことに変わりはないとも言えようが、今日では、明治時代にそうであつた以上に、そのことが誰の目にも隠しようのない事実となつてゐる。現代の政治家は、自己の選挙区だけでなく、また自国の有権者だけでなく、全世界にまたがる言わば潜在的有権者とも言うべき人々の全体に対して、政治的責任を負つてゐるのである。このような観点から政治家としての大平を見た場合、どのような観察と評価が下せるであろうか。これが、以下の論述のテーマである。

大平正芳は、最も基本的な価値観や人間観に関しては終始、動かない信念を持つていたが、政策的な課題についてはあらかじめ立てた原則から演繹していくよりは、実地の経験を咀嚼しながらゆつくり考えを練り上げ、政治家として熟成していくといったタイプの人物であつた。従つて、ここでも、その国際政治家としての成長の軌跡を時間を追つて観察するという方法を用いることにする。ところで、大平の政治家としての経歴を眺めると、大きく言つて、前後二つの部分に分けられるようである。前半は、池田勇人を支える人間としての

大平正芳である。それは一九四九（昭和二四）年の六月に吉田茂内閣の大蔵大臣に就任した池田の秘書官となつてから約一年後に政界に出馬し、やがて一九六〇年に成立した池田内閣の官房長官、そして一九六二年から一九六四年までの二年間、外務大臣をつとめあげるまでの時期の大平である。外相辞任の後ほどなく、池田の死がやってき、私生活でも愛児を失うという悲劇に出会い、大平は公私ともに人生の転機を迎える。時に五四歳であつた。それ以後、言わば一人立ちした政治家としての大平正芳の歩みが始まる。この後半の段階が始まつた時点では、もちろん政治家大平の将来は未知数であつたが、結末を知っているわれわれから見れば、それは、宰相としての大平正芳を準備し、それに至る道であつた。この後半の部分、とくにその最後の局面での大平は、当然のことながら、眩しいほどのスポットライトの中に立つており、そこでの彼の表情は、一挙手一投足に至るまで、知られている。それに比べて、大平の政治生活の前半は、それほどよくは知られていない。そこで、以下の記述では、前半と後半とで、やや異なる手法をとりたい。

具体的には、つぎのような構成で、論述を進める。前編では、大平正芳の前半の政治生活のうち、外交問題に関わる彼の言動に焦点を当てる。すなわち、池田内閣の外務大臣としての大平の行動を素描し、同じ時期の彼の対外問題に関する言説を検討する。これらの作業を

通じて、大平のスタイルとでもいうべきものが浮かびあがってくるであろう。こうして観察された大平的なるものがどのように完成されていくかをあとづけるのが、後編の仕事である。そこでは、大平の行動よりも、その思想に関心が払われるであろう。彼が何をどう行つたかは周知に属するので、彼が何をどう考えたか、その思想の形成過程を考察の主たる対象に選びたい。

前編 池田内閣の外務大臣としての大平正芳——その思想と行動

一 外相就任の経緯と大平外交の舞台

一九六二（昭和三七）年七月一八日、第二次池田改造内閣に入閣してから一九六四年七月一八日、第二次池田内閣の第三回目の改造に伴い、後任を椎名悦三郎に譲って、自らは自民党筆頭副幹事長に転ずるまでの満二か年間、大平は外務大臣をつとめた。これが大平にとつては初の大任ポストであった（当時はまだ官房長官は国務大臣ではなかった）。

この時の外相就任の経緯は、田中角栄の回想によれば、以下の通りであったと言う。前尾繁三郎幹事長、田中角栄政務調査会長、大平官房長官の三人（赤城宗徳総務会長は病氣入院

中）が池田私邸に呼ばれて改造内閣の人事の原案作りを池田首相に命ぜられたが、外務、大蔵、幹事長の三つのポストを先ずこの三人に割り振ることから始めよというのが、池田が与えた唯一の具体的な指示であった。三人の間では、大蔵に田中、幹事長に前尾、外務に大平、と余り議論もなく話がまとまった。大蔵省出身の首相をもつ内閣としては大蔵大臣に同省出身者を当てないほうがよいという配慮が働いたことと、幹事長は前尾留任が妥当という判断があったことを考えれば、大平に外務のポストが回ってきたのはいわば消去法の結果だということになる。⁽²⁾

大平は外交に強いというイメージはこの後出来あがるのであって、この際の外相就任は、むしろ偶然のなりゆきであったと言えそうである。いわば、外相のポストが向こうからやってきたのであって、大平が積極的に外相たることを目指していたわけではない。もともと、大臣として外務省に乗り込んだ大平が省員に、「外交は素人」だからよろしくと挨拶したからと言って、彼の外交辞令を額面どおりに受けとる必要はない。ちなみに、外務省出身者以外の人間が外相に就任するのは（戦前の軍人の例は別として）、石橋湛山内閣での岸信介が初めてであったが、その後、岸内閣の藤山愛一郎、池田内閣の小坂善太郎と続き、大平が就任するころには、もはや常識となっていた。もともと大平は官房長官として「内政と外交の一

体化」を「寛容と忍耐」と並ぶ池田内閣の政治運営の基本として重視してきたし、職務上、毎週月曜日の午後には外務次官以下の人々から外交問題についてブリーフィングを受けるのを習わしとしていた。また、内閣調査室から上がってくる情報は、内政、外交の区別なく、官房長官の耳目に供される。従つて、外交問題について大平が、全くの白紙であつたわけでは無論ない。³しかし、外相になつた大平がどう行動するのかは、本人自身にも分からないことが多かつたであろうし、まして外からの観察者にはほとんど判断の材料がなかつた。

このような大平の国際政治家としての初舞台となつたのは、外相就任後間もない一九六二年九月二一日の国連第一七回総会での演説である。演説の内容については、後でまとめて考察するが、初の国際的舞台での演説を英語で行いたいと大平は考えたらしい。しかし、外務省の官僚の強い忠告を聞き入れて、ようやく思い止まつたという。このエピソードに、彼の英語に関する自信のほどが現れているが、このことも大平が外相のポストをむしる積極的に引き受ける心理状態にあつたことを推測させる。なお、漢籍に対する造詣とともに、大平が英語についての独自のセンスを持つていて、好んで英語のボキャブラリーを政治の場に持ち込んだことは、よく知られている。

もつとも、厳密に言えば、この国連での演説が大平外交の初舞台であるとは言えない。それ

に先立って、日米二国間の場ではあるが、一九六二年八月初旬、第二回日米安全保障協議会に出席している。さらに、外相就任前のことであるが、前年十一月に箱根で開かれた第一回日米貿易経済合同委員会にも官房長官として参加している。池田内閣時代に始まった経済問題に関するこの日米間の定例的な閣僚会議は、大平自身がその創設に関与したわけではないが、彼はその役割について、世界中の数多くの国を相手にしなければならぬ米国の政治家に、年に二日でも三日でもいいから日本のことについて注意を払う機会を与えるという意味で、この会議は意味があると考えていた。また、この会議の効用を「過大評価することも誤りであれば、過少評価することも同様誤り」だと、如何にも大平らしい言い方をしている⁴。

第二回日米貿易経済合同委員会は一九六二年十一月にワシントンで開催され、大平はもちろん外相としてこれに出席し、昼食会でジョン・F・ケネディ大統領が日本の国際的責任と国際経済問題での日米間の一層の協力の必要を説くスピーチを印象深く聞いた。一九六三年一月に東京で開催を予定されていた第三回会議は、折からのケネディ大統領の暗殺で延期となり、実際には翌一九六四年一月二七、二八の両日に開かれ、大平外相が議長をつとめた。日米安全保障協議会の方は、大平の外相就任期間中にもう一度、第三回会議が一九六三年一月一九日に開催されたが、この時は、キューバ危機の直後であり、キューバ危機以後の

国際情勢が議題となつたという。後に述べるように、日本と台湾の国民党政府の関係が緊迫していた当時であり、そのことも議題に取り上げられた。ついでに言えば、二年間の外相時代を通じて、二度ヨーロッパ諸国を訪問する機会があつた（二度目の訪欧の際は、イランにも立ち寄っている）。

以上が、大平外交が展開された舞台のおおまかな描写である。つぎに、彼が実際に取り扱つた主な外交案件の内容に即して、大平の行動を観察しよう。

二 日米関係

まず対米関係については、沖縄援助、原子力潜水艦の寄港問題ならびに利子平衡税問題があげられる。これらの問題をめぐつて折衝をした相手はエドウィン・O・ライシャワー米国外務大臣であつたが、ライシャワーとの接触を通じて生まれた相互の友情が大平にとつてのひとつの財産になつたことは、長い目で見て大事であつた。⁵⁾この時期は、六〇年の安保騒動の余韻がまだ残つていた時代であるだけに、大平・ライシャワー間の阿吽の呼吸がデリケートな日米間の諸問題の処理を大いに助けたことは、想像に難くない。⁶⁾

日本の国内政治との関係で言えば、沖縄問題と原子力潜水艦寄港問題が火のつきやすい争

点であった。前者については、前任者である小坂善太郎外相時代からの懸案を引き継ぐ形で、日米協議委員会を発足させることについての原則的な合意が、大平・ライシャワー間で成立した（一九六二年一月二日）。これは、沖繩への日本政府からの財政的支援を増額することで徐々に日本の沖繩への発言権を強めて行き、将来の返還の基礎にしたいという日本側の思惑が背景にあった。沖繩援助の主管官庁である総理府と外務省との権限問題が絡んでいたため、日本政府内部の調整に手間どり、日米協議委員会が正式に機能し始めるまでには、なお数か月を要した。⁷⁾

一九六三年一月九日、ライシャワー大使は大平外相との会談で、ノーチラス型原子力潜水艦を乗組員の休養ならびに補給の目的で日本に寄港させたいという米国側の希望を伝えた。一九六〇年代の初頭ころから米国海軍は太平洋海域への原子力潜水艦の配備を始めたが、同じく原子力潜水艦といっても、核ミサイル搭載可能なポラリス型とそうでないノーチラス型の二種類があった。米国側がこの問題で日本政府の意向を打診してきたのは、核兵器搭載型でない以上、形式的には一九六〇年の新安保条約のいう事前協議条項が適用されるケースではないが、核問題に格別な敏感な日本の世論を考慮に入れてのことであつたらしい。⁸⁾この問題に関する大平外相の態度は、国会の外交演説（一九六三年一月一日）での説明によれ

ば、「原子力を単に推進力として利用しているにすぎない潜水艦」であるから「それ自体核兵器の日本への持ち込みでもなければ、また、将来における核兵器の持ち込みに連なるものでもない」というものであった。そこで、放射能汚染の懸念がどの程度あるかについて安全性を確認するための原子力委員会の答申や米側への照会などといった一連の手続きを経て、日本政府は一九六四年八月二八日の閣議で原子力潜水艦の寄港を認めるという決定を下した（その時点での外相は大平の後任の椎名悦三郎。なお、初の原子力潜水艦の佐世保入港は同年一月二二日⁶⁾）。

しかし、大平外相のこの言明にもかかわらず、将来、核兵器搭載可能なタイプの米艦船の日本領海への出入りが問題になった際に、果たしてそれが事前協議の対象となるのかどうか、また実際に協議が申し込まれた場合に、日本政府はどう回答するつもりなのかという微妙な問題は、あいまいなままに残された。『大平正芳 人と思想』に寄せた序文でライシャワーはこの点に触れ、つぎのような趣旨のことを述べている。すなわち、非核三原則のうち「持ち込み」（イントロダクション）について、核兵器搭載艦船の日本の領海通過はその限りでないとするのが当初から日米間の了解であったが、やがて、それらの艦船の寄港は「持ち込み」禁止の原則への違反であるから認められないとする解釈が日本国民の間で生まれる

ようになった。一方、核兵器の有無について否定も肯定もしないというのが、米国政府の立場である。従って、日本政府がこの点をあいまいにして国民に明確に説明することを避けて、単に「米国政府を信頼する」と述べるだけであつたために、結果的には、米国が条約に違反して密かにこれらの艦船を日本に寄港させているという印象を日本国民が持つことになつるのは、米国政府にとつては困惑の種であつた。「これはそのままにしておけない事態であつたため、私は大平にその点について非常に慎重に話した。彼はきわめて簡潔に答えた。私はこの問題を理解しており、それを解決しようと思つている。だから、あなたは、これについて他のものに話してはならない、と。私は彼が何をしたかは知らないが、この問題に関する議論はただちに止み、何年も後まで再び生じなかつた。それが起こつたのは、私が大使を辞めてからずっと後、大使館も日本政府も他の人が責任者になつてからのことである。「それまでには」大部分の日本人は、アメリカの軍艦が核兵器を積んで日本の領海を通過することが当然だと考えるようになっていた」。ライシャワーは、このことで大平が信頼できる人間であることが証明されたと言ひ、大平は日本の政治という世界でものごとを成し遂げるコツ（魔術）を知つていたと述べている。¹⁰

しかし、大平自身が「六三年の日米関係の中で最も大きな波紋を投げかけた」問題と呼ん

でいるのは、このような新聞を騒がせた問題ではなく、もつと地味な利子平衡税問題であった。大平が外相に就任したのと同じ日（一九六二年七月一八日）に、ケネディ大統領はドル防衛の趣旨から国際収支特別教書を提出した。そのための方策のひとつとしてケネディが提案したのが利子平衡税の創設であり、その趣旨は、外国人による米国資本の調達コストを年一％引き上げるといふものであった。これは、米国資本に大きく依存していた当時の日本にとっては重大な関心事であり、池田は日本の経済界が受けた衝撃をワシントンに伝えて緩和策を講じてもらうための使節を送ることにした。最初、池田が考えたのは宮沢喜一経済企画庁長官であったが、急病の宮沢に代わって大平が渡米することになった。^⑪この問題の最終的決着は一九六四年九月のことで、大平が外相のポストを去った後であるが、その際、米国がむしろ進んで年間一億ドルまでの特別免除を日本に与えるという寛大な態度をとったという。そのことが示すように、当時のアメリカはまだ経済的余裕があり、それだけの度量を持つていた。これが、大平の対米外交を助けた環境的要因であったことは否定できない。^⑫

一九六二年一月、キューバへのソ連の核兵器持ち込みという冷戦期最大の危機にケネディ政権は直面するが、池田首相にせよ、大平外相にせよ、この危機を自分自身が何らかの決断と行動を迫られるような問題として受け取ったという形跡はない。このような第一級の

国際的危機は当時の日本の能力からすれば自分の手の届かないところにあるなものであり、日本はまだ言葉の上での米国支持以上のものを期待されることのない気楽な存在であったと言えるのかも知れない。¹³⁾

三 日韓交渉

これに比べてアジア外交は遙かに厳しい様相を見せた。長年の懸案である日韓国交正常化問題について、巷間では、岸信介前首相の周辺が親韓国グループであり、池田内閣は韓国との国交樹立には消極的だという印象が持たれていた。ソウルから東京を訪れる非公式の接触者も、岸のところに入出入りすることが多かったようである。¹⁴⁾一方、日韓不和は米国のアジア政策にとつての障害であると感じていたケネディ政権は、ソウルと東京の双方に影響力を行使して、その和解を促進する構えであった。¹⁵⁾また、一九六一年の軍事クーデターの結果成立したばかりの朴正熙政権も、経済建設優先の見地から、国内の対日強硬世論にもかかわらず、日本との関係樹立を急いでいた。こうして、池田首相も、日韓国交正常化を是非実現したいと公言するようになっていた。

このような背景で、金鐘泌中央情報部長が来日し、大平外相との交渉の場面を迎える

(一九六二年一月二日)。欧州外遊中の池田首相不在の間に行われたこの大平・金会談において、請求権に基づく支払ではなく経済協力の名義で総額六億ドルを日本が提供するといふ基本線で、合意が成立した。その後の日韓交渉は「メモ用紙二枚に合意事項を書き入れた」(金鐘泌の日本の新聞記者とのインタビューでの表現)いわゆる「大平・金メモ」を土台とした仕上げの段階に入る。しかし、韓国の政情不安のために交渉は延引し、正式に日韓国交の正常化が実現するのは、次の佐藤内閣になってからのことであった。大平・金会談は、当時にあっては疑惑と非難の対象とされることはあっても、池田内閣や大平外相の功績として言及されることは希であった。しかし、日韓交渉全体の流れから見て、この会談での合意が大きな曲がり角であったことは間違いないようである。大平が「これでやっと日韓交渉において両当事者が同じ土俵の上に降りてきたことになり、その他の案件についても交渉の糸口が開けた」と後年語っているのは、十分な理由がある。¹⁶⁾

四 中国問題

同じく、この時期には実を結ばずに終わったが、後日の大平自身の業績に大きく関わることになるのが中国・台湾問題である。岸内閣の時期には、長崎国旗事件に象徴されるよう

に、日中関係は極度に冷え込み、日中貿易も断絶していた。池田内閣の登場とともに、北京の態度も若干和らぎ、民間の日中貿易再開への期待が膨らんだ。一九六一年末の国連総会で、中国代表権問題に関して重要事項指定方式を適用するという決議案を米国が提案したときに日本も同調してその提案国として名を連ねたことで、北京は激しく池田内閣を攻撃した。そうしたことがありはしたが、対ソ関係が悪化する中で北京は対日貿易の拡大を望んでおり、振り子は日中関係の改善とは言わないまでも、その緩和の方向へと動き始めていた。こうした動きは、一九六二年一月九日のいわゆるLT貿易覚書の調印にまで行き着く。一方、米国でも、一九五〇年代末から六〇年代初めにかけて、トルーマン政権以来の硬直した中国政策を批判する声が上がりが始め、ケネディ政権内部でも中国への新しいアプローチの模索が密かに始つてはいたが、また表面上は、米国の対中政策の刷新は見られない時期であった。大平外相の中国政策を取り巻く国内・国外の環境は、およそ、このようなものであった。¹⁷⁾

具体的には問題はつぎのような形をとって展開した。はじめ倉敷レーヨン、ついでニチボウのビニロン・プラントの中国大陸向け輸出に関して日本輸出入銀行の融資を政府が認可したことをきっかけに、台湾政府および自民党内の親台湾派の憤懣が一気に高まった。それに加えて一九六三年九月、周鴻慶事件が発生した。中国からの油圧機器訪日視察団の通訳で

ある周が亡命を企て、ソ連大使館に駆け込んだ。周ははじめ台湾への亡命の意思を表明したが、その言は二転三転し、結局は北京への帰国の意思を口にするようになった。その間の経緯が込み入っていたために、この問題の処理をめぐって、大平外相は北京に有利にことを運んだという攻撃を、ふたたび台湾および国内の親台湾派から浴びせられることになった。アメリカからの批判の声も高まり、大平の苦慮は深まった。

ことほど左様に中国問題については、国内（与党や政府内部を含めて）の意見が対立し、取扱いが困難な争点に直ぐに発展しやすいことを身をもって経験したことが、大平に「日中間問題は日日問題」だと言わしめることになった。なお、このような事情で台湾側が大使を召還するところまで悪化した外交関係を破局から救う奥の手として、池田首相と大平外相が考えたのが、吉田茂元総理の台湾訪問であった（一九六四年二月三日）。この時に吉田が台湾側に与えた中国への輸銀融資をしないという約束を、後で吉田茂個人から張群総統府秘書長官に宛てた書簡という形式にしたのが「吉田書簡」（五月七日付）として一般に知られているものである。⁽¹⁸⁾この年七月の大平外相の台湾正式訪問は、台湾との関係修復の努力の仕上げでもあり、また、大平の第一次外相時代の終りでもあった。⁽¹⁹⁾

大平の台湾からの帰国後間もなく、池田勇人は総裁に三選され、内閣改造を行う。大平は

外相の座を降りて、椎名が後を継いだ。その時点では知る由もなかったことであるが、この時、既に池田の不治の病は進んでいて、間もなく世を去り、政治の場面は佐藤時代へと移って行くのである。話を先へ進める前に、一旦元へ戻って、第一次外相時代の大平の言説を概観し、言葉の面から、彼の外交行動の分析を加えておこう。

五 外務大臣としての言説

まず、第一次外相時代の大平の主要な発言をリストアップしておく。主な材料となるのは、つぎの五つの演説である。（以下の叙述で、これらの演説で使われている表現に言及する際は、煩を避けるために、演説の頭に付した記号を用いる²⁰）。

- ① 国連第一七回総会での演説（一九六二年九月二日）
 - ② 第四三回国会での外交演説（一九六三年一月三日）
 - ③ 国連第一八回総会での演説（一九六三年九月二〇日）
 - ④ 第四四回臨時国会での外交演説（一九六三年一〇月一八日）
 - ⑤ 第四六回国会での外交演説（一九六四年一月二日）
- 多くの観察者が述べているところによれば、大平は下僚の書いた草稿をそのまま読み上げ

る人ではなかったという。それにしても、この種の公的な場での演説の常として、役人の手が入っていることは間違いがないし、外務大臣という役職が言わせている部分が多いことも否定できない。たとえば、国連第一七回総会での演説は、先にも述べたとおり、大平にとつての初の国際舞台での演説であり、しかも国会での外交演説にも先立つものであるから、その意味では国際政治家としての大平正芳の文字どおり処女演説と言つてよい。これも前述したが、この演説を英語で行いたいと熱意を燃やしていたというので、かなりの力の入れ方であつたことが分かる。ただ内容から見ると、特に大平らしさを発見することは難しい。就任後間もないころでもあつて、官僚の作文に依存する部分が多かつたのかも知れない。この演説を含めて全体に国連中心主義、自由陣営（特に米国）との協調、アジアの一員としての日本という、第一号『外交青書（一九五六年）』が設定した日本外交の三原則の枠の範囲を出ない（当然のことではあるが）。その意味で、大平の個人的スタイルをこうした演説から読み取ることは、そう簡単ではない。にもかかわらず、やがて次第に形をとつてくる大平的思考ないし表現の片鱗を、そこに探して見ることができなわけではない。

(一) 調和と忍耐

第一の特徴は、調和と忍耐というテーマである。キューバ危機に際して、日本は特に何を

しなければならぬという立場になかったことは先にも述べたが、国際政治の趨勢をみる上で、この事件（というよりも危機回避に成功したという事実）が、大平に相当なインパクトを与えたことは、間違いがないようである。彼はそれを「理性的勝利」(③)と呼び、部分的核実験停止条約の締結その他の「緊張緩和」の兆しと合わせて「冷戦の緩和」(⑤)への見通しについて語っている。いわば「ポスト・キューバ危機」とでもいうべき情勢認識が、そこには現れている。それ自体は、取り立てて言うほどの特徴的なものではないかも知れないが、「冷戦の解消」のために「樂觀もせず、悲観もせず、現実があるがままだに直視して地道な努力を重ねていくことこそ平和への近道」(③)であると説き、「重要なことは、対立を緩和し、あるいは不信を解消するために、忍耐を持つて、不断の努力を続けること」(③)だと述べているあたりは、大平の肉声を聞く感じがする。対決よりも調和を重んじ、忍耐強く合意の形成を待つのをよしとする大平の気質に、これは合っている。

(二) 相互依存論

つぎに目につくのは、「孤立の繁栄はあり得ず」(②)というテーマである。これは、世界経済の中の日本という文脈で現れた例であるが、別のところでは、より広い文脈で語られている。すなわち「今や、一国民は、他の諸国民と政治的にも、経済的にも、文化的にも固

く結ばれている……。個人が、国家の中で孤立して生活し得ないのと同様に、国家も、世界の中で、孤立しては存在し得ない(③)。また「近年における交通、通信網の飛躍的發展は、この地球をますます狭いものにするとともに、諸民族の運命をいよいよ一体化するにいたりました。われわれは国際社会の中で、もはや、"われひとりよし"として孤高のからにとじこもることはできなくなりました」(⑤)とも言っている。こうした考えは、七〇年代には「相互依存」という表現を得るようになるであろう。現に、大平はこのころ早くも、「わが国経済と世界経済との相互依存性」(⑤)の増大について語っている。こうした考えは、ものごとを切り離してそれだけを重視するのではなく、全体の中に位置づけてとらえようとする、大平の「総合的」ないし「複合的」志向とも合致する。

このような相互依存的な国際社会の平和と繁栄のために大国が担うべき責任の重さを、大平は繰り返し、強い言葉で語っている。たとえば「真の平和を確保するために大国の果たすべき役割は、とりわけ重大なものがあり、大国は、全世界に対し、全人類に対し、極めて重大な責任を負っている」、「これら大国は、……全人類に対する無限大の道義的責任」(③)を負うとまで言い切っている。大平にしては珍しい最上級の表現であるが、ここで彼が直接言及しているのは、核兵器保有国の負うべき責任のことであり、その意味では非核保

有国としての日本の国益の主張が背景となっている。しかし、他方で「日本は」その国力の伸長と国際的地位の向上に伴い、世界の平和と繁栄に対し、ますます重い責任を負担」(②) するようになったことも、認識していた。今日では陳腐化しているこのような認識も、六〇年代の初期という時代的背景を考えれば、看過できない。現実に、七〇年代の末までは日本の国力が飛躍的に増大するが、それにつれて、初期の大平の思想の中にあつたこのテーマの持つ意味は、一段と重みを増してくるであろう。

(三) アジア認識

最後にアジアについて、この時期の大平はどのような認識を持っていたのであろうか。アジア重視は、既に述べたように第一号『外交青書』で打ち出されており、この時期までには、ある意味では常套句と化していた。ここにあげた五つの演説のすべてで、大平も、このテーマを取り上げている。とくに最後の二回の国会演説では、アジアと日本の関わりに力点が置かれている。そして、その語り口には、確かに大平調とでも呼ぶべきものがうかがえる。たとえば、次のような例である。「アジアに位するわが国が、アジアの安定と繁栄に寄与することにこそ、世界平和達成のために果たすべきわが国独自の責務があると信ずるものであります。わが国は自らが品位のある豊かな民主主義体制を確立して、アジアの道標にな

るとともに、アジア諸国の最も親近な友人として、その喜びとともに、その苦難をも分かち合わなければなりません」(④)。また、「思うに、わが国は、かつて約百年前、鎖国から開国へと大きな国内変革をへて、自助の精神をもって、営々として政治、法制、経済等の近代化に努め、みるべき事蹟を達成してまいりました。戦後のアジア諸国は、まさにわが国が明治時代にそうであったように、急速に経済開発を推進し、政治的安定を達成しようとする懸命の努力を続けております。従つてわが国は、これら近隣諸国の願望や、その直面する困難を正しく理解し、友情にもとづいた率直な助言と、適切な援助を与え得る立場にある……」。しかしながら、日本はまだアジア諸国の信頼を得るにいたっていないのであつて、そのためには「他のアジア諸国民の苦難を自らの苦難と感ずるとともに、自らの繁栄をアジアの諸国民と分かち合う決意で進まなければならない」(⑤)。大平の好きな「共存共苦」の思想が、ここに顔をのぞかせている。

当時のアジアは、今日のそれとは違つて、経済的にも政治的にもまだ明るさはなく、未来への展望は開けていなかった。「アジアが全体として、安定した調和ある発展をとげるためには、なお相当の年月と幾多の困難が予想される……。のみならず、アジアにおける不安と対立は、常に世界全体の平和に対する脅威となる危険をも包蔵している」。したがつて「わ

が国が、アジアの情勢に如何に対処するかは、日本外交の最大の課題である」(5) というのが大平の情勢認識であり、また、それが当時の一般的な認識でもあった。

(四) 中国問題の影

そこには、中国問題が大きな影を落としていた。前節で見たとおり、大平は当時の国内政治の文脈では「北京寄り」と見られていたが、国連の場では、中国の代表権問題の重要事項指定に関する第一六回国連総会での決議を支持する発言を行っている。と同時に、日本と中国との長く深い関係に言及し、「この問題は種々の複雑かつ困難な要素を含んでおり、性急に結論を出すことは賢明ではなく、危険ですらある」(1)と指摘するのを忘れてはいない。外交演説でも、この点に触れて次のように言っている。「最近、中共政権との間に新たな外交関係を設定せんとする国際的動きがみられますが、わが国としては、アジアひいては世界の平和維持の観点から、事態の推移と国際世論の動向を見究めつつ、慎重に対処する考えであります」(5)。また、衆議院外務委員会での穂積七郎委員（社会党）の質問に答える形で、さらに一歩踏み込んで、「国連におきまして中共政府が国連に加盟される、世界の祝福の中にそういう事態が起りますならば、当然わが国として重大な決心をせなければならぬのは、これは理の当然だ」と述べている。⁽²⁾ 後から見れば予言的ですからあるこの大平答弁に特

別の注意を払う人は、当時、少なかった。

「冷戦を葬り去る」(①) ことが当面の課題だと言い、キューバ危機を乗り越えた世界は「緊張緩和の方向へ動きつつある」(⑤)と見た大平にとつても、「依然、東西それぞれの陣営における真剣な防衛努力を背景とする、緊張した力の均衡」(⑤)が、平和を支える現実的な基盤であり、したがって「自由陣営に属する国々が、自由を守るといふ共通の目的を以って、あらゆる分野における協力を進める」のが「わが国の外交乃至防衛政策の基調」(⑤)だとする彼の信念は、不動のものであった。これまた、ある意味では常套句とも言えるが、以後の大平の実際の政治行動が示すように、この基本的立場に彼ほど忠実であろうとした政治家は少ない。それだけに、中国をめぐる国際政治構造に基本的な変化が起こり、中国が「世界の祝福の中に」国連に迎え入れられる日がくるのを忍耐強く待つしかなかったのである。

以上の考察から、国際問題に関する大平正芳の思想と行動の特徴が、粗削りながら、すでに出来あがっていることを知ることができた。再び機会がめぐってきたときに、大平がどう発言し、どう行動するかを、ある程度予測する材料を、われわれは持っていることになる。

|| 後編は次号 ||

後編の目次

後編 国政治家としての大平正芳―その思想形成過程―

一 大平正芳の日本外交論

(一) 外交の哲学

(二) 総合安全保障論の起源

(三) 国連平和維持機能

(四) アジア外交論

二 沖繩、そして日米繊維交渉

三 政策構想の体系化

(一) 「日本の新世紀の開幕」

(二) 「平和国家の行動原則」

(三) 大平の外交演説

(四) 政権獲得と政策形成

結論 国際政治家としての大平正芳

- (1) 清沢列『外政家としての大久保利通』（中央公論社、一九四二年。復刻版、一九九三年）。
- (2) この経緯は田中角栄「大平正芳君の思い出」による。大平正芳回想録刊行会編『大平正芳回想録 追想編』（大平正芳回想録刊行会、一九八一年）、三九〇頁。
- (3) 菊地清明は後年、大平について「彼は初めから非常に外務省にシンパセティックだったし、外交は大事だという考えを持っていた」と回想している。文部省科学研究所補助金重点領域研究・戦後日本形成の基礎的研究、オーラル・ヒストリー『菊地清明』（一九九四年三月、以下の引用では『菊地インタビュー』と略称）。なお、国際主義的な一橋の学風に触れたこと、若いころ興亜院の官吏として内蒙古に赴任した経験、さらには戦後の占領期に津島寿一蔵相の秘書官として、あるいはまた経済安定本部の公共事業課長として、GHQと折衝した経験などが、大平の国際問題への感覚の形成の背景をなしたと思われる。これらについては、大平正芳『私の履歴書』（日本経済新聞社、一九七八年）を参照。また新井俊三・森田一『文人宰相・大平正芳』（春秋社、一九八二年）二九二頁以下に、大平が学んだころの一橋の学風についての良い記述がある。
- (4) 公文俊平・香山健一・佐藤誠三郎監修『大平正芳 人と思想』（大平正芳記念財団、一九九〇年）一九八～一九九頁、大平正芳『春風秋雨』（鹿島研究所出版会、一九六六年）、九七～一〇二頁。後者は、大平の観点からみた池田内閣の記録という性質の貴重な書物である。

- (5) 前掲、『大平正芳』へ寄せたエドウィン・ライシャワーの序文、特に一八〇～二〇頁を参照。
- (6) 前掲、『菊地インタビュー』によれば、大平外相とライシャワー大使は、毎月定例的に霞友会館で、新聞記者に悟られずに会うことになっていたという。
- (7) 沖繩に関する日米協議委員会設立交渉の経緯については、一次資料に基づく記述はまだない。渡辺昭夫『戦後日本の政治と外交——沖繩問題をめぐる政治過程』（福村出版、一九七〇年、一三〇～一三三頁に、当時の新聞記事をもとにした記述がある。大平がこの問題にどのように関与したかを確認する材料は、今のところない。
- (8) エドウィン・ライシャワー（徳岡孝夫訳）『ライシャワー自伝』（文藝春秋、一九八七年、三七四～三七五頁。これによれば、日本の世論への考慮から米海軍が出し渋っていたこの問題をそろそろ提起する時期だとライシャワー大使がワシントンに説いたのが、そもそもの始まりであったと言つ。
- (9) 前掲、『春風秋雨』、九五～九七頁。
- (10) 『大平正芳』、一八～一九頁。なお、ライシャワーのこの部分の叙述のニュアンスを正確にとらえるには、英文版を参照せよ。Seizaburo Sato et al. *Postwar Politician: The Life of Former Prime Minister Masayoshi Ohira* (Kodansha International, 1990) pp. 20—21. ライシャワーのこの言葉は大平に対する賞賛と受けとって良いのであるが、「核持ち込み」についての日本政府の解釈のあいまいさにまつわる問題は、ごく最近

まで、依然として日米間の難問として残っていた。この時の大平外相および池田内閣の態度がその発端であったとすれば、この賞賛の辞はライシャワーの意図とは異なる意味に転じるかも知れない。なお、前掲『ライシャワー自伝』には、「原潜寄港よりはるかに重大だがほとんど人の注目を浴びない事件が、一九六三年四月四日に起こった。日米関係にとって非常にデリケートな問題なので、私は一九六六年に日本を離れるに当たって、個人的メモの中から関係箇所を切り取って処分してしまった。だから記憶に頼って書く」という謎めいた一節がある。その後にくつらひライシャワーの記述によれば、この一九六三年四月四日の事件とは、官房長官が国会の答弁で、核兵器搭載の米艦船の日本寄港について「アメリカを信頼している」と述べたことを指している。ライシャワーはさらに筆をついで、この政府答弁に困惑したライシャワー大使が大平外相を大使公邸に招き事態を説明したところ、大平が自分にその処理を任せてくれと言ったとあって、前掲『大平正芳』への序文での話へとつながる。ところが、調査した限り、一九六三年四月四日の政府答弁に当たる事実はないし、この前後の官房長官（この当時は黒金泰美）の発言にも、それらしいものは発見できなかった。ライシャワーの記憶に混乱があり、前後関係が不明になっているのか、それとも表に出ていないならんかの事実があるのか、いずれかであろう。

大平自身の態度については、外相を辞任した日に、「自衛隊の核武装はダメだが、米からの核持込みは認めるべきだ」と、ある記者に語ったとする証言がある（小和田次郎『アスク日記一九六三〜一九六四』、

みず書房、一九六五年、一四一頁）。また、後年、総理としての大平が、この点に関する日米間の理解の食い違いを直すべく、非核三原則を二・五原則に改める意図をもっていたが、周囲のものに押し止められたという（福島正光の談話）。

なお、非核三原則という表現が定着するのは佐藤内閣の時であり、それについての国会決議が初めて採択されたのは、一九七一年一月二四日、すなわち沖繩返還協定の承認と同時であった。この点は、渡辺昭夫「佐藤内閣」（林茂・辻清明編『日本内閣史論』、第一法規、一九八一年、第六卷、一七一～一七二頁および九四頁）を参照。

(11) 前掲、『春風秋雨』、一〇六～一〇七頁。

(12) この時、日本側の交渉に当たった大蔵省為替局長（渡辺誠）は、はじめ七五〇万ドルという数字を出したが、米國務省側から密かに菊地外務省北カナダ課長（外相秘書官の後、菊地はこの地位にいた）に連絡があり、米国は一億ドルの心積りでいるという情報が伝えられた。翌日、日本側から改めてこの数字を出し、結局その線で合意が成立した。最近の日米交渉を知るものの中には、牧歌時代としか映らない話である。前掲『菊地インタビュー』を参照。なお、ここでは取り上げなかったが、大平外相時代の日米外交問題としては綿製品交渉があった。これについては、後編の叙述を参照。

(13) キューバ危機に関する米国側の対日通告の状況については、『大平正芳』の記述（二〇五頁）と『菊地イン

タビュー」とでは食い違いが、ここでの論点とは関わりがない。

- (14) 李庭植（小此木政夫・古田博史訳）『戦後日韓関係史』（中央公論社、一九八九年）、七三頁および七九頁。
この著者は朴政権とくに金鐘泌中央情報部長による日韓交渉は「屈辱」的であり「腐敗」的であるとして、好意をもって書くことはなご。

- (15) たとえば、Draft NSC Action, Task Force Report on Korea (dated June 5, 1961) と題する米国家安全保障会議の文書には、「日韓関係の改善を……日本の首相のワシントン訪問時に討議にのぼせるべきであり、またこれを韓国の新政権に促すべきである」とある。これは、同年六月に予定されていた池田の訪米に備えての米国内閣の議論である。

- (16) 大平正芳「当面の外交問題―ベトナム紛争と日韓交渉の妥結」（一九六五年四月一七日、愛知県豊橋市での講演）、前掲『春風秋雨』、一五八頁。当時の米国内閣文書も、日韓交渉がこの秋の東京での非公式会談で進捗したと観測して、つぎのように述べている。「過去の二、三週間に日韓両政府間のハイレベルの非公式会談が東京で開かれたが、これによって両国が基本的な了解に達し、それに基づいて近い将来に主要な諸問題を解決することができるかも知れないという希望が見えてきた」。Chairman Park's Visit, Washington, November 14—15, 1961, Position Paper: Korea—Japan Relations, p.3.

なお、大平の外相就任前、官房長官当時の秘書官であった今野耿介によれば、初動の段階での韓国側（金

鐘泌中央情報部長）との接触は内閣調査室が行ったが、その結果得られた情報は、大平官房長官に伝えられたので、金部長の人物などについても、あらかじめ大平はある程度の予備知識を持っていたと言つ。本書所収の今野耿介「エピソードを通じてみた大平像」を参照。

(17) 大平自身はこの時期の日本の対中政策（特に政経分離）に関する米国の態度を説明して、次のように述べている。「中共との貿易は現状においては民間レベルの商業ベースで行われるものであり、政府は特に中共貿易をエンカレッジするものでもなければ、デイスカレッジするものでもないことを「アメリカ側に説明した。それに対して」アメリカ側の反応は、アグリするでもなく、デイスアグリするでもなく、ただアランダスタンドできるという程度のものであった」。前掲『春風秋雨』一二四頁。菊地秘書官の記憶によれば、米国の態度はもう少し厳しく、日米貿易経済合同委員会の場で日中貿易についてかなり強い日本批判の発言があったという（前掲、『菊地インタビュー』）。現在公開されている米国側の記録でも、このことはある程度裏付けることができる。たとえば、一九六四年一月に東京で開かれた第三回日米貿易経済合同委員会の席上では、フランスの北京承認のニュースの与えた衝撃も手伝って、中国問題についてかなり突っ込んだ議論がなされた。その席で、デイン・ラスク國務長官は、一〇年前ならば日本の対中政策は対米関係から導き出される副産物であったかも知れないが、未だにそのような言い方するのは心外だと、かなり苛立った口調で不満を漏らし、日本が自分自身の国益の観点から現在の中国の国際的な行動が危険な

ものであるという認識を明確にすべきだと論じた。会議後のプレス向けの発表をどうするかに関して、大平外相は、アメリカの北京に対する態度が「かなり固い」(rather stiff)ことは分かるし、ラスク國務長官がそのような米国の態度を説明するのも結構だが、もし長官が日本もそれに同調するようになると言えらるるとすると、正直言って考え得る日本の世論の反応から言って、あまりは芳しくないだろうと述べた。結局、プレス向けの発表では、本来の議題である貿易・経済問題だけに絞るということで、落ち着いた。Department of State, Memorandum of Conversation, Secretary Rusk and Foreign Minister Ohira, January 28, 1964, Communist China: Joint Economic Committee (ついでに言えば、ついで引用した文書を含めて、米国内側の公表資料でも、日本側の発言らしい部分はほとんどが削除されていて利用価値が少ないことが多い。こつした削除が、日本政府側の要望で生じているのは明らかであり、遺憾なことである)。なお、この前後の日中関係および米中関係については、以下の二書を参照。緒方貞子『戦後日中・米中関係』(東京大学出版会、一九九二年)、田中明彦『日中関係一九四五〜一九九〇』(東京大学出版会、一九九一年)。Daniel S. Papp (ed.), *As I Saw It by Dean Rusk as told to Richard Rusk* (Penguin Books, 1990) には中国政策に当たった一章があるが、その中で日本への言及は全くない。またラスクのこの回顧録の全体を通じて、池田大平への言及は一切なく。

(18) なお、台湾側の文献では、これとは別により重要な内容の「吉田書簡」があると云う。すなわち、二月の

吉田訪台の際に蔣介石との会談で五項目からなる「中共対策要項」についての合意がなされ、その合意を確認する意味で吉田が帰国後に張群に宛てて出した書簡（一九六三年四月四日付）があると言つ。これによれば、二つの「吉田書簡」があることになるが、日本側の証拠でこれを裏付けることは今のところできない。この点については、前掲、田中『日中関係』、二一六～二二七頁の説明を見よ。最近、岸、池田、佐藤三代総理に宛てた吉田茂の書簡が公表されたが、池田に宛てたものの中に、一通、この問題に触れたものがある（ただし、本文を欠き、追伸部分だけしかない）。以下のような内容である。「プラント（積出、中共への）なるべく阻止もしくはなるべく引き延ばされたきものと存じ候、少なくとも民間ベースには政府が顔を出さぬ体に致したく、岸、石井両君より委細希望御了承とは存じ候えども一言附記つかまつり候」（昭和三九年三月八日付）。『中央公論』（一九九三年一〇月号）、七五頁。

- (19) 台北での大平外相の表情については、本書所収の阿部穆「『台湾』問題に心砕いた大平外交」を参照。なお、『春風秋雨』で大平が取り上げている外交問題には、本文で論じたもの他に、タイ特別円問題、ガリオア・エロア問題、ビルマ賠償再検討交渉があり、これと韓国の対日請求権交渉を合わせて、彼は「戦後処理問題」と呼んでいる。このうちのビルマ賠償再検討交渉は、大平の第一次外相時代に決着した問題であるので、本来ならばここで扱うべきであるが、割愛した。

- (20) これらの演説は、外務省『わが外交の近況』第七号、同第八号に収録されている。

(21) 第四六回国会衆議院外務委員会（一九六四年二月二日）での穂積七郎委員の質問に対する答弁。

〔付記〕 本稿は、少なくとも次の二つの点で、不完全である。第一に、当時の公文書がまだ僅かしか公開されていないために、事実の確認ができない点、多々残っていること。第二に、国際経済政策に関する大平の思想と行動が、極めて部分的にしか扱われていないこと。そうした意味で、これは一つの試論である。より完全な大平正芳論は、将来の課題としたい。

あとがき

世界的規模で長引くコロナ禍の不安のなか、新たにロシアのウクライナ侵攻が加わり、世界はかつてない激動の時代を迎えております。そんな中での『硯滴考』12号の発行ということで、今号は、ウクライナ問題について「いま大平ありせば」をテーマに、それにふさわしい作品をご紹介申しあげました。そこで、あとがきとしてウクライナ侵攻問題に関し、ひとこと付言させて頂きます。

ご案内の通り、大平がライシャワー博士と共有した究極の世界観は「国際正義の確立」と「世界貿易の実現」を指すことでした（6号参照）。それに対し、プーチン氏は真逆の「国際正義の侵害」と、その結果として「世界貿易の混乱と分断」の招来という暴挙の愚を犯しました。それは大平にとり許しがたい大罪です。その意味で、「いま大平ありせば」の問いへの答えは明白です。その答えは「いまここに私の思いを受け継ぐ岸田総理がいるではないか」だろうからです。

現に、岸田総理は一部保守陣営から故なく優柔不断を云々されながら、振り向けば、ウクライナ侵攻以来3カ月、憲法改正の選挙公約・防衛費増大・反撃能力保有等々の諸施策を

肅々と進められている。国民の生命と財産、自由と民主主義を守るために身命を賭しておられる。大平の衣鉢を継ぐ総理大臣として、たいへんありがたくも心強いかがりです。

これらの施策は戦後長らくタブー視されてきたものばかりです。大平は、そのような戦後の総決算を提唱した初めての総理大臣でしたが、残念ながら道半ばにして旅立ちました。それだけに、権威主義国家叢生の今こそ、「力による一方的な現状変更の試みは世界のどこであつても絶対認められない」との大義を、勇断をもって掲げられた岸田総理の手で、戦後の総決算をなしとげ国と国民を守つて欲しい。これこそ大平が望むところだと確信いたします。

それにしても、侵攻が長引くにつれ、一部野党とメディアからは「政府与党はこのどさくさに紛れて憲法改正と防衛費の増強を画策している」などの偽善が、またぞろ出始めていますが、これはプーチン氏得意の侵攻正当化口実の写し絵の如しです。その偽善を多くの国民は既視感をもつてお見通し済です。「国民の良識」と「一部野党とメディアの偽善」の分水嶺の帰趨はつとに明らかです。大平は、いついかなる時にも日本国民の叡智と良識を信じてことに当たつて来ました。そのひそみにならない、ひるむことなく初志を貫徹されますよう心からなるエールをお送りしたいと思います。

本号が、そのための何らかの糧になれば望外の幸いです。

けん てき こう

硯滴考 [12]

令和四年六月吉日 発行

発行者 公益財団法人大平正芳記念財団

〒102-0082

東京都千代田区一番町 10 番地 相模屋第二ビル 5 階

TEL : (03) 3230 - 2213

FAX : (03) 3230 - 2214

URL : <http://www.ohira.org>

